
時空の追い人 - 紅炎のソレンティア -

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の追い人 - 紅炎のソレンティア -

【NNコード】

N3463N

【作者名】

海士龍

【あらすじ】

少年の祖父が死んだ。突然もたされた知らせにベルタは愕然とする。大嫌いな祖父なのに気が急ぐ。一刻も実家に帰らなければ、と。彼の知らない真実はすべて過去の扉の向こうにある。時を渡り、彼は真実を追う。

紅炎のソレンティアの一次創作小説です。『翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -』にリンクしています。

1・帰つておこでと、君が嘆くから（前書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」(<http://soloentia.jp/>) の一次創作小説です。

1・帰つておいでと、君が嘆くから

……なんか来た。

そう感じた一瞬後、扉に鍵を閉めておけば良かつたと、激しく後悔をした。

「やつほー！ ベルにゃん、生きてる～？」

……死んだ。

今！ まさに今！ 死んだぞっ！！！

俺はベッドに突っ伏した。

青髪の猫獣人。

俺の隣室で生活しているはずなのだが、
その服装は、なんつーか、あれだ。あれ。メイド姿。

女装か！？ と聞いたら、

女性化にやん！ と言い返されてから、

彼だか彼女だかの格好については見て見ぬ振りを決めている。

「最近顔見てないからひつちから顔出してみたよ。風邪は治ったかな?」

「いや、まだ……」

「どうか、お前のおかげで頭痛が増したぜ。俺はベッドに突っ伏したまま、手を左右に振り、返事をした。すると、彼だか彼女だかは、べらりと封筒を出した。」

「べるにちゃんにお手紙が来てたにゃん」

「手紙?」

「べるにちゃんの実家からにゃん」

「にゃんにゃん言ひな、頭痛い」

体調不良のため、若干余裕のない俺は、悪態を付きながら、差し出された封筒を奪い取った。

開いてみると、懐かしい人の文字が綴られてあった。しかし、それは「く短く、至つて簡潔に。

『 大旦那さまが危篤です
すぐにご帰郷下さい 』

「 どうしたにゃん? 」

無言になつた俺の顔を、下から覗き込んでくる。

「 帰らないと 」

「 帰るにゃん? 」

「 」

驚いた声に返事はしない。

ベッドから足を降ろし、夜着を脱ぎ捨てた。

「べるにゃん、顔色悪いにゃん」

「知ってる」

「具合まだ悪いにゃん？」

「知らない」

「本当に帰るにゃん？」

「帰る」

帰らないと。

何日前に書かれた手紙だろうか。

危篤だつたのは、いつたいいつ？

手紙を送つてきたのは、家政婦デボラだ。

彼女が「大旦那」と呼ぶ相手は1人しかいない。

祖父だ。

あのジジイが死んだら……。

嫌な汗が出る。

考えるだけで恐ろしい。

無事なのだろうか。

幼い妹を思い、体が震える。

大切に大切に育ててきた妹。

彼女だけは護りたい。

「べるーちゃん……！」

部屋から出る廊中に向かつて声が響く。
振り返る。

「悪い！もう行く！

みんなによろしく伝えておいてくれ」

もう一度、声が響く。

だけど、今度は振り返らない。

帰郷願いを提出するため、俺は学生課に走った。

2・この廻きは、君しか知らない。

紅葉した木々をちりりと横田にして、俺はため息を付く。

(1年と4ヶ月…)

随分と長く帰らなかつたものだ。

馴染みの路地を駆け抜け、腰丈の門を押し開くと、
焦げ茶色の扉が正面に見える。

秋の花々で埋め尽くされた前庭には目をくれず、俺は玄関を叩いた。

「おかえりなさい」

一瞬、自分がいるのかと思った。
幼い頃の自分が。

「ただいま、セレナ」

小さな妹を抱き締める。

暖かくて、柔らかくて、なんだか泣きたくなつた。

家の奥から家政婦のデボラが出てきて、大きな荷物を玄関口に置いた。

「こちらがベルタさんの荷物です。

セレナさんの荷物はすでに車に積んであります

「ありがとう。……って、車！？」

「他にどのように行かれるつもりですか？」

「デボラが運転すんの？」

「私はこの家の留守を預かります」

「じゃあ…」

(マリーさんが?)

そう思つたが、デボラの姪である彼女の姿は見えない。

「マリーは一足先に大田那さまのところに行かせました

「じゃあ…誰が…」

「……」

「ええっ！？ 僕！？」

「安全運転でお願いします」

「……」

セレナを助手席に乗せて、しつかりシートベルトを締めさせる。
無駄に心臓がドクバク言っている。

嫌な汗まで出しながら、俺はハンドルを握った。
一度だけデボラに視線を向けてから、アクセルを踏んだ。

「ベルタ、大丈夫？」

門を出てからしばらく、通りに出たところで、
セレナが俺の顔を窺つてきた。

「顔色悪いよ？」

「……」

「お祖父様、大丈夫かな？」

「……」

「お勉強、大変？」

「……」

「音楽掛けてもいい？」

「いっ、ごめん！無理！」

頼むから、空気のように息を凝らしていくくれ……」

白状しよう。

運転免許を取つて以来、一度も運転したことがない。
だって、ソレンティアに入学してしまったのだ。
仕方がないではないか。

集中して運転しなければ、ぜつたい事故る！
死ぬつ！！！

しかし、家を出発してから30分も経つと、
集中力は切れるわけで。
隣から寝息が聞こえてくるわけで……。

ひたすらに真っ直ぐと伸びる道路には他に車もなく、
運転は単調な上、俺も慣れつていうものが出てくる。

そして、ぼんやり考へてしまつ。

（今なら分かるよ、お前のこと……）

フロントガラスにうすすらと写る自分は、
酷く歪んでいて、みすぼらしく見えた。

『バランスが…取れないんだ』
『バランス？』
『そう…』
『構つて貰えなくなるのは寂しい』

『大丈夫。ちゃんと構うから』

でも結局、彼は休学して、
退学こそしなかつたけれど、でも、会えない。

(今なら分かるよ、だから…)

だから、今は一番お前と話がしたい。

『俺、お前のこと�이分かるよ』
『なんでだよ、気持ちわりいー』

分かっているような気がしていただけかも知れない。
だけど、本当に分かっていた。
…と思いたい。

『2人はよく似ています。

というか、同じなんです！

同じくらいどうでもいいんですよ、他人のことが

以前そう言われた時は、首を傾げたけれど、
今は、その通りかもしれないと思う。

振り返れば、俺は彼と同じことをしている。

俺の方が半歩も、何歩も、彼より遅れているけれど。

だからこそ、彼と話がしたい。今。

(俺、分かるよ。お前のことが…)

「あ
「どうしたの？」
「今のところを左に曲がらないといけないんだった
「次のところを曲がつたら？」
「ダメだ。一方通行だ。曲がない」

仕方がない。戻ろう。
俺はハンドルを切った。

この辺りから、道が悪くなる。
狭いし、砂利が多い。

スピードを落として進むしかない。

車が珍しいのか、横を過ぎる時に振り返られる。子どもたちが追ってくる。

やがて、森の入口に辿り着いた。

ここからは歩くしかない。

適当な場所に駐車して、セレナに降りるよう促した。

「自分の荷物は自分で持てるよな?」

「うん」

「じめんな」

「どうして謝るの?」

「自分の荷物で手一杯で、セレナの荷物を持ってあげられないから」

「大丈夫よ。

私だって私の荷物くらい持てるもの」

「でも……」

(でも、お前に重たい思いをさせたくないんだ)

苦しい思いも、
悲しい思いも、
なにも知らずにして欲しい。
そう願つてしまつ。

「ベルタ、泣かないで？」

「泣いてないよ」

「きっとお祖父様は大丈夫だから。…ね？」

「わうじゅ…」

(わうじゅなくして)

言葉にならず、口を開えます。

今、頭の中を巡るのは、祖父のことでは無かった。
それがとても不謹慎なことのように思えて、
自分のこの想いをセレナには悟られたくないかった。

森の奥。

そこに独りで暮らす祖父。

自分の殻に閉じこもるかのように。

俺も祖父のように暮らせたら、
俺の醜さから、みんなを護れるのに…。

(俺、お前と同じだよ)

違うと思つたから、好きになつて、
もつともつと話がしたいと思つた。

俺とは異なる意見が聞きたくて。

たくさん喧嘩して、もう無理だと思つて逃げて、
でもやっぱり好きだと思つて、会いに行く。

けど、今は、
どこに会いに行けば、会えるのだろうか…。

踏み締めた落ち葉が小さく声を上げる。

ここは“眠り森”

その名に相応しく動物たちの気配はない。

静かな、静かな、そして、昼間でも夜のように暗い森。

やがて、大きな館が見えてきた。

3・死に行く君に残された刻の欠片

「お帰りなさい」

鈍い音を響かせて扉が開くと、
薄闇の中から青白い顔が現れ、掠れ声を響かせた。

「ただいま」

そう応えたが、帰つてきた気はしない。
ここは俺の“家”じゃないから。

「さあ、早く大旦那様のところへ」
「リリーさん、ありがとう。その……」

家政婦デボラの姪である彼女は、俺にとって姉のような存在だ。

10歳年上で、気の強い彼女には、

幼い頃、散々からかわれた記憶がある。

だけど、

一度たりとも彼女を嫌つたことはない。
むしろ好きだ。

「喧嘩をするくらいにあつけなく散った初恋の相手は、
もはや隠す気もないのにで言つてしまえば、彼女であり、
その時ですり、あまりにもあつさうと振りてくれたもので、
氣まずくなる余地さえ無かつたほどである。

そんな彼女もすでに自分の家庭がある身だが、
何かあるとすぐに駆け付けてくれるといふは変わらない。

礼を言つと、彼女はニッコリと微笑んで、
俺と妹セレナの手から荷物を受け取つた。

「部屋に運んでおへわね

」頷き、彼女から荷物の代わりに燭台を受け取つた。
右手で燭台を持つと、左手でセレナの手を握る。

「行こう、セレナ」

「くそ、と小さな頭が動く気配を感じてから、
俺は薄闇の中に足を踏み入れた。

じつじつと、蟬が溶けていく音が響く。

足下から床に、そして壁に、長く長く伸びた影が、
ゆりゆりと蠢きながら、ゆっくりと後を追つてくる。

ぎゅっと強く手を握られて、俺はセレナを見やつた。

俺の腰丈ほどしかない小さな彼女は、

前方をじっと見据え、一步一歩、踏みしめるよつこ歩ひでいる。

やがて、祖父の部屋に前にたどり着いた。

しつかりと3度その扉を叩くと、

部屋の中から、誰だ、と低い声が響いた。

「俺です。ベルタです。セレナも一緒に
お前だけ中に入れ
でも……」
「お前だけ入れ
……」

俺は背を丸めてかがむと、セレナに燭台を手渡した。

「コレーさんのところへ行つて

セレナが頭を左右に振つた。

「……うん
「……うん
「……うん

暗い廊下を一人で歩かせるよりもマシかもしれないと思いついた。
妹の頭をひと撫ですると、俺は立ち上がる。

「すぐ戻つてくるからな」

「……うん。……あ……ベルタ……」

「ん?」

「……氣をつけて」

淡く微笑んで、俺は祖父の部屋の中に入つた。

薄暗い部屋の中、

祖父のベッドの枕元に一つだけ置かれた燭台の灯りだけを頼りにそろりそろりと歩いて、祖父に近付く。

「お久しぶりです」

「……」

「危篤だという知らせでしたので、

ここに付く頃には、てつきりくたばつているかと期待していました。

「とってもお元気で、ガッカリです」

祖父は答えなかつた。

枯れ木のような腕を掛布から出すと、俺の方へと伸ばしていく。

灯りが、彼の腕を照らした。

「……っ」

思わず息を呑んだ。

その腕があまりにも醜かつたからだ。

黒ずんだ肌。

彼が忌むダークエルフの肌の黒さなど比ではない。

それは、どろどろに腐った色。

事実、腐つて肉が落ちた指先は骨が見えている。

不意に灯りの炎が大きく揺れ、祖父の顔を照らした。
再び息を呑む。

それから、大きく後ずさった。

顔中に広がった黒い痣。

もはや元々の造形が分からぬほど。
醜い。

美しい種族であるとされるエルフが、
ここまで醜くなれるものなのか…。

愕然として、俺は立ちつくした。

「ベルタ…」

ハツと我に返つたのは、名を呼ばれたからではなく、
その醜い手で、腕を掴まれたからだ。

死が近いことなど信じられないくらいに強い力。

「お前に受け入れて貰いたいモノがある」

「……いやだ」

「お前はそのためにしてる」

「……いやだ」

「お前の役目だ」

「いやだつ！」

「いやだつ！」

力いっぱいに振り払つた。

灯りに照らされた祖父の顔が驚く。

そして、その拍子に、ぽろりと右眼が敷布の上に落ちた。

「ならば、セレナを部屋の中に入れろ」

俯いた頭上に、しゃがれた声が響いて、

慌てて顔を上げ、祖父に向かつて頭を左右に振つた。

「だつ、ダメだ。それだけは……」

祖父が何をしようとしているのか、正確には分からぬ。
だけど、それは、途轍もなく恐ろしいこと。

そしてそれをしなければ、祖父はけして死ねない。
死んではならぬと、自分を課しているからだ。

ならば、永遠に祖父が独りでそれを抱え続ければいい。
そう思うが、それが不可能なことだと認められないほど、
俺は幼くはない。

(誰かが…)

その誰かが、なぜ自分なのだろうかと思つた時、
いつも思い出すのは、父親の存在だ。
彼は祖父を毛嫌いし、家も子も何もかも捨て去つた。
ただ、愛する人だけを連れて逃げた。

『お前も、お前の父親のように、わたしから逃げるのか?』

そう、何度も祖父に問われてきた。

逃げたいと思った。何度も。

そして、セレナと一緒に逃げるべきだったと、今この瞬間にも思つ。
だけど、俺は逃げられなかつた。

つまりは、これも運命つていうことなのだろう。

一步前進する。

怖い。

けれど、また一步、足を前に踏み出す。

大丈夫。

そう心の中で呟き、何が？と心に聞き返す。
だけど、きっと大丈夫。

そう思うことしか、今は慰めにならない。

祖父の手を、今度は自分から握った。

「受け取つてやるよ、ジジイ」

言つと、祖父は顔の痣を歪めた。
それが躊躇するような表情に見えて、俺は苦笑を漏らしてしまつ。

「けして人を憎まず…」

「けして人を傷付けず、人を妬まず、恨まず」

「……心穏やかに生きよ」

それは幼い頃から言われ続けてきた言葉。

祖父の言葉を引き継いで言えば、

彼は俺の言葉のさらに続きを口にした。

「それが…この呪いから逃れる唯一のすべ…」

繋いだ手が熱くなる。

皮膚が焼け爛れしていくように感じて、祖父の手を振り払いそうになつた。

何かが流れ込んでくる。

それは魔力。

だが、俺がソレンティアで学び、出会つてきた魔力とは、まったく異なるモノ。

黒く黒く黒く醜く汚れた力。

その時、田の前が真っ白になつた。
自分の体が床に崩れ落ちていくを感じる。

だが、その僅かな一瞬、俺は鮮やかな縁を見た。

谷に広がる鮮やかな色。

そして、谷を吹き抜けていく風の声。

その声はまるで女性の嘆き声のように悲しく聞こえたが、谷に住まつ者達の声は明るく、活気に溢れている。

そこに、キラリと輝く何かが落ちた。

そして、次の瞬間、谷は死んだ。

緑も消え、人々の笑い声も失われた。

ただ、もの悲しい風の嘆きと、

幾重にも折り重なった骸だけが残された。

ハツと我に返つた。

痛いと感じてからよづやく、

床につつ伏せに倒れている自分に気付いた。

祖父に視線を向ける。

ぴくりともしない彼に声を掛けてみる。

やはり動かない。

立ち上がり、祖父の体を揺さぶると、

その体はボロボロと土塊のように崩れていく。

燭台の灯りが痣を映し出した。

白い肌に黒く禍々しい痣を見つけて、俺は祖父の骸から逃げるよう後に後ずさつた。

だが、本当に逃げたかったのは、骸からではない。
灯りからだ。

自分の体に刻まれた痣を目の当たりにするのが、途轍もなく恐ろしかったのだ…。

4・世界は君に残酷で

人嫌いだった祖父のために、別れの言葉は俺が告げる。

「神の御許で安らかに憩うことができますよ」

薄暗い森に、俺の声は静かに静かに響いた。

祖父の死を誰に知らせれば良いのか分からなかつた。

祖母はすでに他界しているし、

祖父の近親者については聞いたことがない。

彼のただ1人の息子であり、

セレナと俺の父親である人は行方不明で、連絡を取る術がない。

だから、棺の傍には、セレナとリリーさんと俺だけ。

多くの人が眠る墓地は嫌がるだろうと思い、

祖父の屋敷の裏に、棺が入るくらいの穴を開けた。

聖書を朗読し、聖歌を歌い、

遺体の手を胸元で組み、十字架を握らせた。

ただし、遺体はボロボロで、

どれが指で、どこが胸だか分からない。

触れる」とやえ気が引けた。すぐに壊れてしまつから。

遺体に白い布をかけ、柩の中に白い花を入れ、柩は黒い布で覆つ。穴に棺を沈めると、土を被せた。

さすがにそれら作業を1人でやるのは困難で、リリーさんに少し手伝つて貰つたが、セレナにはやらせたくないで、先に屋敷の中へと返した。

よつやく埋め終えると、すっかり日は暮れていて、カンテラの明かり無しでは、手元も見えないくらいに森は暗い。

シャベルを肩に担ぎ、屋敷の中に戻ると、その明かりの下で、泥が付いているわよ、トリリーさんが俺の頬に触ってきた。俺は顔を背け、その手から逃れた。

「リリーさんが汚れてしまう」

「洗うからいいわ」

「なり、俺の顔を洗うよ」

彼女の横を擦り抜けて、洗面所に向かつ。訝しが声が追ってきた。

「どうしたの？」
「なんでもない」
「そうかしら？」

蛇口を捻って水を出す。

手を洗い、顔を洗い、もう一度、手を洗い、顔を洗う。
洗つても、洗つても、綺麗になつていなによつに思えて、
何度も、何度も、何度も洗う。

「皮が剥けてしまつわ」

構わないと思つた。

それで綺麗になるのなら。

「もつやめて。汚れていないわつ

泡だらけの手を掴まれて、俺は目頭が熱くなつた。
もつともつと洗わないと、とそれしか考えられなくて。

「癪よ。汚れじゃないわ」

洗つても落ちない、とリリーさんは聲音を低めた。

彼女が掴んだ俺の右手には、その手のひらから手首にかけて、そして、右腕、左肩、首に届くまで、ずっと、醜い痣が出ていた。

それはまるで汚らわしい虫が這つた跡のような痣。誰もが思わず目を背けたくなる。

リリーさんは俺の手の泡を流すと、タオルで拭き、痣の上に包帯を巻き始めた。

「怪我じゃないよ？」

痛くないし、と言つと、彼女は緩く頭を左右に振った。

「痛いのでしょうか…心が…」

ああ、そうかもしれない。

他人事のようにそう思つた。

「ソレンティアにはいつ戻るの？」

「ソレンティア？」

「戻るのでしよう？」

「あー。……ああ」

億劫だな、と思つてしまつた。

あそこは楽しいところだけど、楽しすぎて、なんだか眩しい。
暗く、人目を避けられるこの森の中にいることが、

今の俺には相応しいように思えた。

祖父がそつやつて生きて、そして、死んでいったように。

「ダメよ！ この屋敷から追い出すわよ。

屋敷の鍵は私が持つているんですからねっ」

「俺が相続したのに？」

「関係ないわ」

いや、あるだろ？。

ツッコミ切れなくて、なんだか笑つてしまつた。

そんな俺を見て、リリーさんもフツと表情を和らげる。
どうするの？ と首を傾げてきた彼女に俺は真顔になつて。

「今の状態でソレンティアには戻れない。

調べたいことがあるんだ」

「調べたいこと？」

「マスターなら何か知つてているかもしねない

「マスター？」

「ぐん、と頷く。

そして脳裏に思い浮かべるのは、恩師のこと。
ジルベルト・ラファエーレ・バルバート。

聖ハギオス神学院で俺の担当教官をしてくれた人物だ。

「彼に会わなきゃいけない気がする」

5・それは記憶の欠片たち

遠くに鐘の音が聞こえる。

それは始まりの音。

その音を、俺は校舎裏のゴミ箱の上に腰を降ろして、ひとりで聞いた。

(「」は嫌いだ。

「こんなところに来るつもりはなかつた」

そう思い、天を仰ぐ。

青空を塞ぐように高く大きな校舎が広がつており、
その棟の一番高い塔のてっぺんに、大きな金色の鐘が下がつている。

その鐘が再び鳴り響いた。

そして、もう一度。

本当なら、友人たちと同じ学校に通うはずだった。
そして、一緒にたくさん遊ぶはずだった。

そう思えばこゝも、

この場にいることを強要されている自分が許せなかつた。

(悔しい)

幼くて力のない自分は、祖父の言つとおりにするよつない。
反対されれば、諦め。

賛成が得られなければ、やはり諦めるしかない。

そうじるといわれたことだけをこなす。

聖ハギオス神学院。

その初等部への入学も、その延長線にあつた。
祖父に命じられなければ、俺がこんな学校に入学するわけがないのだ。

「君…」

声を掛けられたことに気が付いたのは、鐘の音が止んだ後だ。
低く響いたその音に被つて、聞き取ることができなかつたのだ。

「君、新入生ですかね？」

「……」

「鐘の音が聞こえませんでしたか？」

入学式は始まっていますよ。講堂に向かいなさい」

「……」

「君……」

答えない俺に、声を掛けてきた男は更に近付いてきて、呆れた様子で、俺の顔を覗き込んだ。

「…………君は……もしかして……。

ヴィツィ・エルヴィンの孫の、ベルタ・エルヴィン？」

「…………なん……つ」

なんで？ と言い掛けて、俺は顔を顰めた。

口を利用してやるつもりはなかったのに、思わず声を発してしまった。

すると、もういいや、といつ諦めの気持ちが湧いてくる。
俺は男を睨み付けながら、ぶっきらぼうに言った。

「なんで俺のジジイのこと知ってるんだ？」

「……つーか、あんた、誰？」

彼は淡く微笑んだ。

「わたしは、ジルベルト・ラファエーレ・バルバート。
君の担当教官です。
以後、わたしのことは“マスター”と呼びなさい」

「君ね……」

呆れ声に俺はますますふて腐れた。

「元気なのは構わないけれど、暴力は良くありませんね」

「相手が先に殴ってきたんだ」

「殴りたれるよつな」と言こませんでしたか?」

「殴りたくなるような言葉を、俺に言わせた相手が悪い」

「君ね……」

ため息をひとつつべと、ジルベルトは、
俺の赤く腫れた頬に片手を当てて、魔法を唱えた。

みるみるしぐれに痛みが引いていく。

「マスター、今のは？」

「サンスです」

「サンス？」

「魔法です」

「魔法？」

「わたしはソレンティアの卒業生ですか？」

「ソレンティアって、何だ？」

「そこからの説明が必要でしたか…」

そして、聞かされた魔法学校の存在。
異世界の話は、6歳児の心を強く惹き付けた。

「俺もそこに行きてえー。
あつといよつてつ合つてこる氣がある」

「そうですね…。

君はまずその言葉遣いからして、ソレンティアが呑つていませんからね

「ソレンティアを卒業しないと、魔法使いになれないんだよな?」

「ええ。卒業して、自分の世界で魔法を使う許可を得なければ、たとえ、ソレンティアに在学中に会得した魔法であっても、自分の世界では使うことができません」

「……つてこいつとは、俺のジジイもソレンティアの卒業生か」

俺が独り言のように呟つと、

ジルベルトが瞳を瞬かせたので、俺は言葉を付け足した。

「前に、……たぶん、魔法だつたと思つんだけど、掛けられたことがあって……。

ジジイに頭を触られて、パアッと熱くなつたんだ。
そしたら、それから、誰かを殴つたり、蹴つたりできなくなつた

……

「え…」

「殴るうとするんだけど、拳が止まっちゃうんだ。
見えない壁にぶつかるような感じがして。

そんで、力が萎えちゃうんだ。

だから、俺、殴つてないよ?」

蹴つてもいい、と言つて、
ジルベルトは怪訝そうに眉を顰めた。

「しかし、相手は怪我をしたのでしょうか？」

「だから、椅子を投げ付けたんだ

「……」

「マスター！ サナスかけてーっ」

ノックもせずに扉を開いた俺に、ジルベルトは顔を顰める。

「またですか？」

「俺、聖歌隊やめるー」

「それはまた……」

「もう飽きたんだよっ」

強く言い切った俺にジルベルトは更に顔を顰めた。
そして、腕を伸ばして、
俺の額や肩、腹に負った痛みを魔法で消してくれる。

「サナスは心には効きませんので……」

「大丈夫。そこは痛くないから」

「本当にですか？」

「…………俺

「はい」

「……俺、…………音痴なんだって」

「…………」

「声が汚いって。俺が唄うと、みんなの耳が腐る……って

「…………そうですか」

「……俺、聖歌隊やめてもいい？」

おぞむおぞむ尋ねると、ジルベルトは机に頬杖を置いて、僅かに怒った様子で答えた。

「君の好きにして下さー

「触り心地が良いからです」

「じゃあ、なんのために粘土を触るんだ?」

「何かを作りうとするからいけないんです」

「うまく作れないかも」

「後で洗えばいいんですよ」

「……手が汚れそう」

「粘土です。触ってみますか?」

「マスター、それ何?」

「……………やつこつもん?」

窓枠に頬杖を付いて、俺は外を眺めていた。
ふと、ジルベルトを呼ぶ。

「どうしましたか?」

「あの人、誰だろう?」

「どうやらの方ですか?」

窓の外を指差すと、ジルベルトは、ああ、と納得する。

「あの緋色の衣の方ですね？」

「そう。あの赤、すぐえ鮮やかで目を引く」

格好いい、と言つと、ジルベルトは同意して頷いた。

「彼はカーディナルです」

「それ名前？」

「いいえ。教皇に次ぐ高位聖職者の称号です」

「へえ」

都にいるべき者が何の用で学院まで来たのだろうか、と尋ねると、ジルベルトはまるで他人事のように淡々と言つてのけた。

「わたしに会いに来たのです」

「は？ なんで？」

「カーディナルに推挙して下さるやつだ。
今日はその前の面談でしょう」

「はあ～？ 推挙？」

「空席ができたとかで…」

「マスター、それって、すうこことなんじや…？」

「そうですね…」

「……もしかして、嬉しくない？」

俺の言葉にジルベルトは少し考え込む仕草をした。
それから、うーん、と低く唸つた。

「嬉しくないわけではないのですが、
今はまだ時期ではないよつな気がします」

「時期？」

聞き返したが、ジルベルトは答えなかつた。

仕方が無く、俺は再び窓の外に視線を向ける。

鮮やかな赤。

光沢のある衣は、陽の光を受けて、黄金色の反射光を放つ。

「かつけえー」

「そうですね」

独り言のつもりで口にした言葉に、ジルベルトが応じた。

彼はいつの間にか俺の傍に立ち、同じよつて窓の外を眺めてくる。

「この道に踏み入れた者としては、あの衣は憧れです

「いつか着てみたいってこと?」

「そうですね」

「俺も……憧れる……」

「そうですか？」

「うん…。あの赤に…」

「用に由来する名前ですね」

「マスター！ 僕、妹ができた

「妹ですか？」

「セレナって名前なんだ。俺が名付けた

「そりなんだ。綺麗だろ?」

俺は嬉しくなつて更に報告した。

思えば、家族ができたことに、ほしゃいでいたんだと思つ。

「俺の母親の名前は、ティーダっていうんだ。
それから、父親の名前は、ラクティスっていうんだって」

12年ぶりに会った母親が教えてくれた両親の名前。
祖父は俺の両親の話を避けようとしていたし、
その名前さえも俺には教えてくれなかつた。
祖父はまるで俺の両親など存在していないかのように振る舞つてい
た。

「ティーダが君に会いに来たのですか?」

「そりなんだ。妹を抱いて……つて。
マスター、俺の母親のこと知つてんの?」

「いえ。……少しだけ」

ジルベルトの表情に迷いの色が浮かぶ。
何か言い掛け、口を開ざし、
やはり思い直したのか、再び口を開いて、閉じた。

「なんだよ……？」

「いえ、その……」

「マスター？」

「……言いますけど、怒らないでくださいね？」

「は？」

「じつは、ラクティスとわたしは、ソレンティアで共に学んだ仲なのです」

「は？」

「つまり、友人といつになりますね」

言つ前はあれほど躊躇したくせに、元一度口を開けば、他人の話をするかのように、ジルベルトは言つてのけた。

「なつ。なんで今までそれを内緒にしていたんだよつー」

怒鳴った俺に、ジルベルトは視線を俺から逸らす。

「君が父親に思つことがあると察していたので…」

「思つことがあるも何も。俺、産まれてから一度も会つたことない
しー

ジジイからね、ジジイのことも俺のことも捨てた最低なヤツとし
か聞いてねえーよー」

「やはりそうでしたか」

「……………ド?」

気持ちを落ち着かせ、俺はジルベルトに問いかける。
何ですか、と振り返ったジルベルトに俺は続けた。

「俺の父親って、ビーフシチュー?」

ソレンティアで学んだってことは、魔法使い?「

「ええ、ラクティスもソレンティアをちゃんと卒業しましたから。なかなか優秀な成績でしたよ。わたしよりもです。ラクティスもここに就職していたら、今ごろ、わたしと院長の座を競っていたかもしれませんね」

しかし、ドジルベルトは続けた。
声のトーンがやや下がる。

「彼は、彼の父親に逆らいました。
君のお祖父様は、ラクティスが聖職者になることを望んでいたのです」

「知ってる。それが嫌で逃げたんだろう?
んで、ジジイは代わりに俺を聖職者にさせようとしている」

罪がどうの。
許しを請えだの。

6歳の孫に意味不明なことを言い聞かせ、
聖ハギオス神学院に放り込んだのだ。

直に初等部を卒業する年齢になつたが、

その時の祖父の言い分は、今、思い出しても納得できない。

（許しつて、なんだよ。

いつたい誰に請えればいいんだ！

俺が何か悪いことしたのかよつー！）

興味なんてさうもない神学を学び、
その救いなんてサッパリ期待していない神さまに祈つて。

「ジジイも意味分かんないヤツだからさ」

結論はいつもこれ。

そう言って、俺はジジイについては諦めることにしていく。
ところが、ジルベルトは言葉を紡いだ。

「君のお祖父様、ヴィッツ・エルヴィンは、
ラクティスやわたしなんかが足下にも及ばないほど優秀だったと
聞いています」

「ソレンティアで？」

「ええ」

「だから、マスターは俺のジジイのことも知つてたんだ？」

初めて出会った時、
“ヴィツツ・エルヴィンの孫の、ベルタ・エルヴィン？”と言われ
た。

ラクティスの友人であるのなら、普通、
“ラクティスの息子の、ベルタ・エルヴィン？”と尋ねるところだ。

「ジジイって、そんなに優秀だったんだ？」

信じがたいことだった。

俺の知つている祖父は、人嫌いで、

暗い森の奥で独りで暮らしているような人物だからだ。

面白い冗談なんて言われた例はないし、

それどころか、口を開けば、命令ばかりしていく。

難問を解いているかのように、

眉間に皺を寄せた俺を横目にして、ジルベルトはポツリと零した。

「いつか君もソレンティアで学ぶ」となるかもしれませんね…」

6・愛つて、何なんだらうな

白。

ローブから靴まで、すべて白。

それがこここの制服だ。

6歳に入学して、

18歳になる直前まで通った学校を、
俺は仰ぎ見るようになって眺めた。

久しぶりのはずの場所なのに、
そこは何一つ変化が無くて、

あの時間の延長であるかのような錯覚に陥る。

けれど、俺は今、

白すぎる制服を身に着けてはいけない。

白い群れの中に異色が紛れている様子は、
誰が見ても明らかだった。

いくつもの視線を感じながら、校内を歩く。

在学中、何度も歩んだ廊下を進んでいると、ふいに声を掛けてくる者がいた。

誰かと思い、振り返ると、よく知った顔が、やっぱり、という表情をつくりつた。そして、俺を指差して、ゲタゲタ笑つた。

「やだ！ 何その頭！！！」

約2年ぶりの再会だった。

…だというのに、この女、ゲタゲタ笑いが止まらないでやんの。若干、腹立ちながら、不服そうに言つてやる。

「親愛なるギゼラ。

久方ぶりの再会にはまず笑いよりハグだろう」

「はいはいはい

小刻みに震える体がガシッと抱きついてくると、俺も抱き返して、すぐに離れた。

「で？ 染めちゃったの？」

「気分転換にな

「またスゴイ色ね」

「綺麗だろ？」

「そうね。

でも、貴方の髪、キラキラしてたのに

「気に入らないか？」

「勿体ないわ

「勿体ないを、捨ててみたかったんだ」

「……やつ」

俺が歩みを進めると、

ギゼラは身に着けた純白のローブで風を切りながら付いてきた。

「院長室に行くの？」

「院長室にいるかなあ

「さういふとゆつて」「

ジルベルト・ラファエーレ・バルバートのことだ。
彼は俺がソレンティアに入学する少し前に、
聖ハギオス神学院の学院長に就任している。

「さりと貴方のその頭を見たら、驚くと思うわ

「怒られると思うか?」

「どうかしら?」

何色にも染まつていない。

何の罪も犯していない。

制服の白は、そういう意味を持つ。

対して、俺は、

たぶん、もう、ダロドロだと想つ。

ギゼラは、俺がソレンティアに行くと決める少し前に、
俺の赤く腫れた頬を見ながら、ぼやいたことがある。

「愛つて、何なのかしら?」

その言葉を、

俺はソレンティニアで何度か思い出すことがあった。

「愛つて、何なのかしら？」

あと3日で、18歳の誕生日を迎えるつていうのに、
貴方はちつとも成長がないのね、と、
ギザギザは散々言つたあとで、ぽつりとそんな言葉を零した。

「は？」

彼女の意図が分からず、俺は聞き返し、数時間前に別れた彼女に拳で殴られた頬に、冷やした布を押し当てる。

「貴方を見ていると、つべづべ想うの。愛って、何なのかじら？」

「慈しみの心だろ？」

教典の言葉通りの答えを返してやると、ギゼラは眉を寄せた。

「でもね、ベルタ。

“愛”が“慈しみの心”だとしたら、なぜ貴方はあの子に殴られたの？

「そりゃあ、もつ愛がないから殴ったんだろう

「……なるほどな」

ギゼラの顔は明らかに腑に落ちていない。
納得の言葉を口こしたもののは、

「貴方はあの子を慈しんだ?」

「それなりに……たぶん」

「随分と自信なく言うのね」

「だつてさ」

俺はギザラに向かって肩を竦めて見せた。

「俺も“愛”って、よく分かんねえし」

愛には、4つの種類がある…………らしい。

聖ハギオス神学院では、

その4つのうち“アガペー”と呼ばれる愛を、
もっとも尊いものとし、この愛のみを抱くよう生徒たちに教える。

それは、無条件の愛。

万人に平等で、けして見返りを求めない愛である。

だから、教師達は言うのだ。
特別な誰かを作つてはならぬ、と。

教師達が忌む愛というものがある。

“愛”とはそのすべてが素晴らしいものではないことを、
生徒達は教え込まれる。

つまりは、“エロス”と呼ばれる愛がある。

肉体的な愛。

主に男女関係の愛であり、

それは自分本位の愛であり、見返りを求める愛だとされる。

“誰か”がいて、初めて生まれる愛であり、

その愛を知れば、自分もまた同じだけ愛されたいと欲する。

そして、満足に達するほどの見返りが得られない時、人をどこまでも残虐にすることのできる愛だ。

……だとすると、

彼女に殴られたのも、エロス的な愛の表れだったのかもしれない。

そんなことを、その当時、思つたのを覚えてい

「愛つて、何なんだろ? な……」

「え?」

突如としてボヤいた俺に、

ギゼラは歩みを止めて、怪訝な顔で振り返った。

「何、突然。また誰かに振られたの？」

「まあ…。なんつーか

「いいわね。

ソレンティアで大いに羽を伸ばすことができて」

「…」それでも、いろいろあつたんだよ

「せうよね。髪を染めてしまつくらいだものね

「そんなどこの色が気に入らないのかよ？」

「貴方じやないみたいなんだもの」

「髪が違つただけだろ？」

「瞳が濁つてる」

「濁つてる？」

「自由に好きなことをやつているはずなのに、
ちつとも幸せそうじやないのね。

貴方がソレンティアに行くと決まつた日、
私、ここを出て行ける貴方が羨ましかつたわ。
でも、今、貴方を見て、少しも羨ましくないの。
…私、たつたひとりの“特別な人”なんていらない」

「ギゼラヘー。」

「私の愛は“アガペー”だけでいいもの」

「俺は……」

ギゼラにひじられて立ち止まっていた足を、再び歩みをせめる。

「俺は、“ストルゲー”や“フィーリア”も大事にしたい」

ストルゲーは敬愛。

“誰か”を尊敬し、従う愛。

親子関係や師弟関係にある愛のことだ。

フィーリアは友愛。

自分と好みを同じとし、

共通の場や目的のある“誰か”に対する愛。

自分を「与えること」で他人を生かす愛である。

「特別な誰かを作ると、平等ではいられなくなるわ」

「分かつてゐる。……けど、ギゼラ。
俺は幼い頃から自分の祖父が怖ろしくて、嫌いだつたんだ。
両親のことも……憎んでる。俺を捨てたから」

「……」

「人を憎むことを知つてゐる俺は、そもそも、
万人に平等ではいられないんだ」

憎む人がいる。
どうしてもその人を愛せない。

「そう告白すると、ジルベールは」いつの間にか。

「それなら、

憎む人の数よりも多くなってはいけないよ、と。

けして、嫌いな人の方が、

好きな人よりも多くなってはいけないよ、と。

だから、と言つて、俺は歩みを止めた。
院長室の扉は目の前だ。

「俺の愛は“アガペー”ではないのかかもしれない。
そうであるように思つていたし、
そうであるかのように振る舞つけれど、

「……」

「でも、結局、愛つて、何なんだろ?」

「……そうね」

「ドロドロに溶けたチョコレートなようなもんだったりしてな」

「何それ

ギゼラはケラケラ笑つた。

「甘党には堪らないわけね」

「俺はよく

“フイーリア”と“Hロス”的狭間で、ドロドロになる

「知ってる」

「普通の恋人は、“フイーリア”よりも“Hロス”を優先するんだろ?」

俺はその逆をしてしまつから、ダメなんだろうな…」

「よく分からぬわ

「憎んでいたけど、両親みたいに、
相手だけが必要で、相手以外はすべてを捨てられるような、
そんな特別な誰かがいるっていうのに、憧れる」

「……そう

ギゼラの手が、俺の腕を軽く叩いた。

「それじゃあ、私はこれで

「ああ。会えて良かつたよ」

「私も。すぐにソレンティアに戻るの？」

「そうだな」

「そり。……またね」

「ああ」

ギゼラに微笑むと、俺は院長室の扉を叩いた。

7・力ある者の悲劇

院長室の扉を叩くと、

かなりの間があつてから、返事が戻ってきた。

彼にはよくあることなので、

俺は気にすることなく、院長室の中に入つた。

「お久しぶりです」

「お久しぶりですね、ベルタ」

真紅のローブを纏つたジルベルトが大きく両腕を広げた。

俺はその腕の中に静かに収まると、じぱりくしてから離れた。

「聞きたいことがあるんですね」

「それで戻ってきたのですか？」

「いえ、祖父が亡くなつたので…」

「え…」

ジルベルトの瞳が大きく見開かれる。
そして、彼は極々小さな声で呟いた。

「ヴィッツ・エルヴィンが…死んだ…？」

その小さすぎる咳きに気付かず、俺は続けた。

「祖父から、彼の遺産をすべて受け継ぎました」

「遺産…？」

「はい。土地や家はもちらん」

個人の財産がプラスであるとは限らない。
もし受け継ぐべき遺産が負債ばかりだとしたら、
それを拒否する権利が遺族には残されている。

ただし、ひとつを拒否するのであれば、
すべてを手放さなければならない。

そして、その逆も然りだ。

俺は袖をめくつた。

袖の下には黒々とした醜い痣。

それをジルベルトの方へと向けて、彼の言葉を待つた。

しかし、彼は無言だった。

痣を凝視し、硬く唇を結んでいる。

「マスター？」

「……」

「教えてください。

祖父はいったい何をしたんですか？」

それは、誰かに聞きたくて堪らず、
けして誰からも聞きたくなかったこと。

あまりにも恐ろし過ぎて。

眠り森に所有する広大な土地。

暮れ森にある家も、けして小さくはない。

生まれてこの方、お金で不自由したことはない、
それなのに、その金がどこから湧いて出てきたものなのか、俺は知
らない。

ただ一つ、察することができたのは、
祖父は過去に何かをし、
その報酬が、それら金や土地であつたことだ。
そして、祖父はそのことを悔い、
また、それを罪だと思い、その許しを請うようと、
俺を聖職者させようとしていたところだ。

「マスターは以前、俺に祖父の話をしてくれました。
ヴィット・エルヴィンは優秀だった、と。
知っていること、すべてを教えてください」

「わたしが知っていることは、わずかです」

「そのわずかを知りたいのです」

「……」

しばし見つめ合つたあと、
彼は、そうですか、と吐息を漏らした。

「そう…。

ヴィッツ・エルヴィンは優秀な魔法使いでした。

そして、優秀と呼ばれるほどの力が悲劇を招きました

「……」

「あなたは、アルカウムという国を知っていますか?」

「アルカウム?」

知らないはずがなかつた。

それはダークエルフの国であり、
エルフの国・アルヘイムは、1000年ほど昔、
この隣国と、大きくて悲惨な戦争を行つていたからだ。

その悲劇を教える教科書は、

アルヘイム国どの学校にも広く使われているため、
その事実を知らない者は、幼子といない。

そして、誰もが知つてゐるもう一つの事実がある。
この二つの種族の戦争は、力での決着は付かず、
同盟を結ぶことで、平和を得たことである。

同盟。

両者の信頼で保たれている平和。

それが脆いものであつてはならないと、
アルヘイムでは、子どものうちから戦争の悲惨をと、
平和の尊さを学ぶよう義務づけられている。

「アルカウムが如何されましたか？」

「アルヘイムとアルカウムの境に2つの谷があります。
ひとつはアルヘイム側にある“響き谷”といふ谷です。
そして、もうひとつはアルカウム側にあり、
その地に風が吹き抜けると、
その風がまるで女の嘆き声のように聞こえる」とから、
“嘆き谷”と呼ばれる谷です」

「嘆き谷…」

ぞくりと背筋が冷えた。

俺は癪のある右腕を、己の手でさすつた。
ジルベルトは続ける。

「この2つの谷に棲む者たちは、
互いの種族を尊重し、平和を強く願い、
そして、それらを行動で示していました。
響き谷の領主フリュー・ゲルは妹を、
嘆き谷の領主ドレイクの息子に娶せたのです。
しかし、これを良く思わぬ者たちがいました」

「良く思わぬ……者たち……？」

「ええ。人の考え方は、一見同じのようにも思えても、人の数だけ異なった考え方があるのです。つまり、アルヘイムすべてのエルフがアルカウムとの平和を望んでいるわけではないということです」

「戦争を望んでいる者がいるという意味ですか？」

ジルベルトは頷いてから、すぐに頭を横に振った。

「そういう者も確かにいるでしょうが、少し語弊があるので、言葉を変えましょう。……世の中にはね、ベルタ、食事を取る時に、自分の席の隣の者が浅黒い肌をしていたら、食事が不味くなると言つ者もいるのですよ」

意味を捉えかねて黙つていると、ジルベルトは更に言葉を変えた。

「ベルタはソレンティアでダークエルフを見ましたか？」

「え、……はい。何度も見ました。

数人ですが、話したこともあります」

暮れ森にも眠り森にもダークエルフはない。
そのため、俺はソレンティアに入学するまで、
ダークエルフを見たことがなかった。

「彼らを見て、どう思いましたか」

「どうって……。肌が黒いなあ、とか。
ゴシゴシ洗つたら白くならないのかなあ、とか。
あとは、うーん……」

初めてダークエルフを見た時のことを必死に思い出す。
あの時、自分はどう思つただろつか。

ネコ耳やウサギ耳を生やした人たちを初めて見た時、
俺は「可愛い！」と叫んだ気がする。
あの耳は、あの尻尾はどうなっているのだろうか、と。
だが、ダークエルフを見た時に、
可愛いと叫んだ覚えはなく、
ただ、ただ、その肌の黒さにギョッとしたのだ。

「つまり、そういうことなのです」

ジルベルトは静かに頷くと、続けた。

「君が感じた驚きを更に大きく、

また強くすれば、それは畏怖となります。

自分とは異なる者への恐れ

自分には理解できない者への嫌悪。

それらを心に抱いた者たちの憎しみが

すべて嘆き谷に、刃となつて向かいました」

「……いつたい…」

「それは一瞬の出来事でした。

たつたひとりの魔法使いがひとつ目の呪文を唱えたために、
その谷に棲むダークエルフたちは皆、地に伏し、
そのまま死に絶えてしまったのです」

「……」

まさか、という思いがそのまま顔に出る。

その俺の顔を見つめながらジルベルトは続けた。

「ヴィッツ・エルヴィンを優秀だと言つた所以は、
彼が2つの魔法を使いこなせるからです。

ひとつは、一瞬にして大勢の命を奪う魔法です。

そして、もうひとつは、奪った命を操ることのできる魔法です」

「……それは」

「そう。禁忌です。

ソレンティアの『基礎魔法大全』に掲載されている

『禁則魔法について』に触れる魔法です。

しかし、ヴィッツ・エルヴィンは“死者を蘇らせる”ことも、“死者を支配する”こともできました

息を呑んだ俺の表情を確認しながら、ジルベルトは更に続ける。

「嘆き谷のダークエルフたちが死に絶えた翌日、その谷にあつたはずの多くの屍が消え去りました。それから後、隣接するエルフの村々がオーク（魔物）に襲われました」

「オーク……」

「1000年前の戦争で、禁忌魔法が使われたことを、君は知っていますか？ その魔法は、殺したダークエルフの屍をオークに変え、操るというものでした。

アルヘイムの魔法使いに操られたオーカは、元は自分の親、兄弟、子であり、仲間、同朋であつたダークエルフたちを

次々に襲い、殺していったのです」

「…その魔法が使われたってことですか？」

なんていう魔法だろうか。
なんて恐ろしい…。

そして、その魔法の使い手は…………おひらべ。

「俺の祖父が……」

「禁忌を犯せば必ず報いを受けます。」

彼が受けた報いとはおひらべの痣……

「痣……？」

俺は己の腕を見下ろした。

痣。それは、右手のひらから手首にかけて、右腕、左肩、首に届くまで、ずっと広がっている。

黒々と。

そして、恐ろしく醜い。

「その痣について調べたことがあります。
それはただ醜いばかりの模様ではなく、
アルカウムで昔使われていたという文字なのです」

「文字?」

驚く俺の右手をジルベルトはその手に取った。

「ええ……間違いありません。これは呪詛です。」

君を齎すのは本意ではありませんが、
この呪詛は、君の負の心を餌として大きく成長していきます。
そして、やがて君を闇へと呑み込むでしょう」

改めて、自分の右腕を見下ろした。
その醜い痣を。

「…」

祖父の遺産。

…これが…。

これまで自分を育ててくれた彼の私財が、
多くのダークエルフを殺し、その屍を操って手に入れたものだとし
たら、
当然、その報いである痣は、俺が受け継ぐべきものなのだろう。

だけど、なぜ、と思つ。

そうするべきなのだと分かっていても、なぜ、と思つてしまつ。
なぜ、祖父は自分の死と共にその報いを
持ち去ってくれなかつたのだろうか。
なぜ、俺にそれを受け継がせたんだろう。

俺の考えを、その表情から読んだジルベルトが、
祖父の代わりに答えてくれる。

「その痣は呪詛です。無念に死んだ者の呪いなのです。

痣の宿主が死んだからと言つて、

無念が消えて無くなることはないのです。

そのため、宿主が死ねば、呪詛は実体化し、兎悪なオークとなり、エルフたちを殺すと、ここに書いてあります

ジルベルトが俺の腕に人差し指を滑らせる。

「それを防ぐためには、

宿主は死ぬ前に、その痣を他者に渡す必要がある、と

「なるほど……な」

我ながら、嫌な笑い方ができるもんだと、驚いてしまう。両親、とくに父親を思い出すと、いつもこんな風だ。普通ではいられなくなってしまつ。

「俺の父親は、この痣を受け継ぐのが嫌で、逃げたわけだ？
自分の身代わりに俺をジジイの元に置き去りにして、愛する女と逃げたわけだ！」

「…………」

「だからつ。俺がつ。俺がこんなものをつー」

「ベルタ、やめなさい。」

その痣は君の負の感情を餌に成長しますつー。
だから、君のお祖父様は、君が心穏やかに生きらるよしこと
「へ行ひよみ」といふこと

「聖職者への道を歩ませたと?
ジジイは最初っから俺に
自分の罪を押し付けるつもりだつたってことじやないかつー!
俺が産まれたときからずつと、ずっと、そうするつもりだつたん
だ!」

俺の意思は? 俺の人生は? 俺は何!?

なぜ俺なんだ。

なぜ俺は逃げられないんだ。

なぜ俺がこんなものを…。

俺が禁忌を犯したわけじゃないのに。

死にたくない。

死にたくない。

怖い。嫌だ。…気持ち悪い。

「なんで、ジジイは、そんな魔法を使ったんだ?

ソレンティアで学んだのなら、禁忌だと分かつてははずだ。

それでも使ったのはなんでだ?」

はつとなる。

自分の顔が青ざめるのが分かつた。

「……金か？」

その弦を聞いたジルベルトも青ざめる。

「ベルタ、違います。

君は君のお祖父様のことを知らなさすぎます。
彼はそのような人物ではありません」

「知らねえよっ！」

俺、ジジイとはほとんどじしゃべったことねえし！

眠り森の、あの薄暗い屋敷に独り、
閉じ籠もるように生きていた祖父。

俺は物心が付いた頃からずっと、
暮れ森の家に独りで暮らしていた。

祖父と話すのは、年に一度あるかないか。

一方的に祖父に呼び出され、命令をされる時のみ。

それは「話す」という行為とは程遠い。

ことん、と音が響いた。

見やると、ジルベルトが机の引き出しから二つの小瓶を出し、

それを「」の手のひらに乗せ、俺の方へと差し出していた。

「知りたいと思いませんか？　君のお祖父様のことです」

「え…」

「この瓶の中は幻薬です。

トキホタルの光液から作った物で、時を渡ることができます」

「それは…。過去に行けることがありますか？」

「はい。こちらの瓶には過去へ行ける幻薬が、
そして、こちらの瓶には未来に戻る幻薬が入っています。
過去に行き、お祖父様を知ることができれば、
もしかしたら、お祖父様に禁忌魔法を使つゝ命じた者が分かる
かもしれません」

「魔法を使おうとするジジイを止めることも」

できるかもしない、と俺は呟いた。

それに対するジルベルトの否定の言葉はなく、
彼はただ、2つの小瓶を俺の手に握らせた。

そして、彼は、

俺の左肩、そして首もと、右肩へと手をかざして、サナスを唱えた。
暖かな光を受けて、俺は吐息を漏らした。

「ベルタ、見てみなさい。

癌が薄くなつたでしょ？」

鏡を差し出されて、俺は自分の姿を確かめた。

たしかに、左肩や首もとの癌は薄くなつたように見える。

「回復魔法ですべてを消すことはできませんが、

回復魔法を掛けられている時、また君が回復魔法を掛ける時の気持
ち、

そこには慈愛があります。

その慈愛は憎しみが源である癌を薄くすることができるのです

どうか、そのことを忘れずに、ジルベルトは続けた。

俺は彼に頭を下げる、二つの小瓶を握り締めて、院長室から去つ
た。

ソレンティアに戻るために。

ベルタ・エルヴィンが去つた院長室に、
再び、ジルベルト以外の者の声が響いた。

否。

それはジルベルトの声だった。

「君..」

君がわたしの姿になるのは、今日限りですよ」

「なぜだい？ 隨分とケチくさい」

「ケチ？ ひどい言ひぐさですね。
わたしのことをケチだ何だと言ひ前ひ、
君は自分の息子の前に、自分の姿で立つてみるべきです」

「嫌だね。わたしはあるの子に嫌われている。
いや、憎まれている」

「その憎しみを受け入れてあげることだが、
君ができる唯一の父親の努めだと思いますが…」

なんと言つても、彼は自分自身のために、
息子を犠牲にして逃げた過去があるのだから。

「何にせよ、

あれだけの量のトキホタルの光液を集めるのは、
苦労したでしょ？ 君も、ティーダも」

「ティーダには本当に苦労を掛けてしまった。
悲しい思いも…」

「分かつてゐるのなら、一刻も早く

彼女を我が子の元へ走らせてあげるべきですね。

君のために、息子のために、と、

トキホタルを探して、何年もアルヘイム中を巡つていたのですか

ら

「そうだな…」

溜息がひとつ。

重々しく部屋に響く。

「とにかく、早く変身魔法を解いてください。

鏡に向かつて独り言を言つてこられるよつて、『気持ちが悪いです』

「……」

「君は愚か者です、ラクティス」

「知つている」

「その愚か者にひとつ助言です」

「……」

「君はまずお父様の墓参りをするべきです。

亡くなつてしまつたのでしょうか？」

ならば、その墓の前で涙するのが、一人息子としての君の努めで

す

「…そうだな。

人は許しを請い、許されて、

許しを請われ、許して、そうして前に進んでいくものだからな」

「ええ…」

ジルベルトが頷くと、彼は彼の姿に戻つて、
軽く片手を上げ、感謝の意を示すと、
彼の息子同様に、院長室から去つていった。

9・汚いわけじゃない、思い出が詰まっているんだよ

戻ってきた。

…やう思ひのは、

ここでの暮らしが長くなってきたからだ。

いつの間にか、部屋には小物が増えたと思ひ。

入学して数ヶ月くらいまでは、

物を増やすなによつに気をつけっていたのを覚えている。

いつでも去れるように、と。

物が、ひとつ。

またひとつ、そつやつて増えていくたびに、
心がこの部屋に縛られていぐ。

それは、

いつか必ず来るであろう、ここを去る日の心残り。

そして、それまでの思い出と、

ここで出会った人たちの心そのもの。

大切な物が増えるたびに、

ここを去りがたくなつていくのを感じてきた。

小物で溢れた部屋は、
もつここの場所を簡単には捨てられないといつ気持ちの表れ。

もつとも、それは、
俺が部屋を片付けないことの言い訳にはならないのだが。

「突撃！！ 隣の友人宅！！
… つてことで、ベルにやんおかえりいいいいいい…！
部屋汚ああああああああああああああ…？！？！？」

ハツと振り返ると、

振り返る前に予測していた通りの人物が立っていた。

「つむせえーーーーー。叫ぶなっ。聞こえるー

つか、今日の俺の部屋は、まだマシな方だーーーー

そもそも数時間前まで部屋を空けていたのだ。
散らかしようがない。

「 もう少しはちゃんと掃除しないと、Gがわいてくるよ。」

「 大丈夫。この部屋で食い物は食つてないから。
散らかっているのは、プリントや漫画が多いからなんだよ。
あと、服。

あ、ー、その服は洗濯してないヤツだ。触るな」

「 一体何日洗濯してないのか問いただしたのですが…」

いかにも“ばばっちい物”を見る目で、
俺の衣服を睨み付ける彼……いや、彼女(?)に振り返つて、
俺は、とこりで、と口を開いた。

「お前、今、暇？」

「掃除はしてあげませんよ」

「こや、やうじやなくて」

「遊んでもあげません」

「俺も遊んでいる場合じゃないので」

「なら、何ですか？」

訳が分からないと、首を傾げる相手に、
俺はジルベルトから貰つた2つの小瓶を見せた。

「俺、今からこれを飲むんだ。

自分で作った幻薬じゃないから、どういう風になるのか分からな
い。

だから、お前、ちょっと見てくんない？」

「それは女性化の幻薬ですか！？ ついにベルにゃん……」

「ちが――――――ひつ――――――」

すかさず全否定。

「とにかく、俺の部屋にいてろ。

暇過ぎたり、掃除していくいかが？」

わかつたにゃー、とか、

にゃーにゃー言つてゐる相手を横目に、

俺は自分のベッドに腰を降ろし、小瓶の蓋を開けた。

一気に飲み干す。

味は……「うーん。甘いような、苦いような、
しゅわしゅわと、炭酸が入つていて」

そんなことを思いながら、ベッドに体を沈めた。

「あやあつ」

「え……」

女の子の悲鳴で覚醒した。

一瞬、あの隣人がふざけた声を出したのかと思ったが、目の前の少女は、たしかに“少女”で、翡翠のような瞳を大きく見張っている。

「あなた、誰？　今、ビニから現れたの？」

「え……っと」

俺はベッドから上体を起こして、辺りを見渡した。

明らかに自分の部屋ではない。

家具も、その配置も違っているし、

何より俺の部屋には、こいつ無いはずの薬品がたくさん並んでいる。

しかし、汚い。

書き殴ったメモ紙が丸められて、たくさん落ちている。

「どうしたの？　具合悪いの？」

声を掛けられて、俺は再び少女に視線を向けた。

「ええっと、ここは……。どうだらうか？」

「ここ？ ティファレト寮よ。

男子寮の405号室。知らないで、ここに寝ていたの？」

信じられない、と少女の瞳が大きくなる。

「新入生なの？ なら、なんて運の悪いの。

ここが誰の部屋なのか知らないで入ったなんて」

本当にここがティファレト男子寮405号室なり、それは俺の部屋だ。

だけど、田の前の少女はそうではない口ぶりで話す。

それでは、いつたい誰の部屋だと云つただろう。

とうえあえず、俺は名乗ることにした。

ただし、この少女が何者なのか分からぬので、
ファミリーネームは躊躇われた。

だから、不自然にならないよう名乗る。

「俺はベルタ。君は？」

「ここは誰の部屋なんだ？」

「僕の部屋だ」

「え」

声は目の前の少女からではなく背後から響き、振り返ると、剣呑な表情を浮かべた青年が、部屋の入口で、その扉に寄り掛かり、こちらを睨んでいた。

「誰？」

「あら、ヴィッツ。戻ってきたの？ おかえりなさい」

「アイシス、君はまた…」。

どうして僕の不在の時に勝手に部屋に上がっているんだ。
しかも、誰だ。そいつは。……不快だ」

「だつて、仕方ないでしょ？」「

あなたがいる時には掃除ができないもの」

「掃除？」

君が“掃除だ”と言つて、僕の部屋の秩序を乱すから、

毎回、毎回、僕は物探しに時間を取られるんだ。
余計なことはしないでくれ。

……いいか、アイシス。

君の目にこの部屋がどう映っているのか知らないが、
この部屋は散らかっているわけではないんだ。

僕流の置き方で、ちゃんと整理されて置かれているんだ。
そう。置かれている。

落ちているのではなく、置いてあるんだ。そのメモも、その瓶も
！」

「どう見ても『ゴミ』よ？ でしょ？ これ『ゴミ』よね？

それに、空き瓶はちゃんと洗つて棚にしまった方が次に使う時に
便利よ？」

「君は分かつていない！」

大声を出すと、ヴィッツは少女との議論を打ち切った。
大股に部屋に入つてくると、どかりと研究机の前に座つた。
試験管を手に取ると、それをクルクルと手の中で回す。

アイシスと呼ばれた少女は、肩を竦めて、俺に振り返つた。

「彼がこの部屋の主、ヴィッツ・エルヴィンよ。
私はアイシス・クルーガー。」

あなたはベルタっていうのね？ よろしく、ベルタ

アイシスはにつこりと微笑んだ。

俺はその笑みを複雑な思いで凝視する。

なぜなら、アイシスが俺の知る“アイシス”であるならば、
それは彼女が俺の祖母だということだからだ。

思わず、

“ばあちゃん！……”と叫びたくなってしまった。

しかし、そう叫ぶには、彼女は若すぎるし、
トキホタルの光液で時間を渡ってきたと言つても、
信じてくれるかどうか……。

そして……。

俺はヴィッツに視線を向けた。

彼は弄んでいた試験管を置いて、次は分厚い魔法書を開いていた。
その、他人を完全に無視する背中を見つめて、俺は息を呑む。

ヴィッツ・エルヴィン。

彼がヴィッツ・エルヴィン。

本当に、あの“ヴィッツ・エルヴィン”であるのなら、
彼は、俺の祖父だ……。

10・あなたが付けた名前だ。あなたが！――

「ベルタ？」

机に向かって魔法書を読んでいたはずの人物が、眉を寄せて、こぢらを振り返った。

「まるで女の名前だな」

俺は思わず言い返しそうになつた。

（あんたが付けた名前だ。あんたが！――）

もちろん、そんなこと言えるはずがなかつたから、じつと堪えて黙つていると、傍らの少女が代わりに言い返してくれた。

「あー、いいじゃない。綺麗な名前よ」

「なるほど。名前通り、女々しそうな顔をしている」

「ヴィックー」

「何といつひとを言つのだ、と、

アイシスは俺を気にしながら、齧める声を上げた。

「名前はその人が両親から貰つた最初のプレゼントよー。
それを笑うなんて、その人自身を侮辱するの一 緒よー。」

「つるやい。僕は何も笑つたわけでも、侮辱したわけでもない。
珍しい名前だな、と言つて、

そいつによく似合つた名前だと、感心してみせたのさ」

「そういう風には聞こえなかつたわ」

「それは君の理解力が乏しいからや。」

「いいか、アイシス。

“ベルタ”には“美しい”とか“美しい人”という意味がある。
だから普通、娘に名付ける名前なんだ。

だが、それを敢えて息子に付けたのだとしたら、
それはきっと容姿ではなく、心が美しく育つようのこと、

そう願つて名付けたものに違いない。……いい名前じゃないか。
もし僕に息子ができたら、ベルタと名付けることにしよう

「あら、珍しいわ。ヴィッツが人を讃めるなんて。
けれど、とりあえず先に貶す辺りが、ヴィッツよね」

困つた人だわ、とアイシスは俺を振り返つた。

「ごめんなさいね。気を悪くしないで。
ヴィッツに悪気はさらさらないの。
だけど、ああも口が悪い上に、天邪鬼で、
彼の中では一本の筋が通つているのだけど、
他の人からしてみれば、口口口意見が変わるよう見えるもの
で、

みんなに嫌われているのよ」

困つた、困つた、と言い、アイシスは続けた。

「人付き合いが苦手とか言う以前の問題なのよ。
他人をまるつきり無視して生きているのよね、ヴィッツは。
自分の部屋と図書館の往復ばかりの毎日で、
ひたすらずっと本ばかり読んでいるのよ。

だから、“本の虫”を軽く越えて“変人”って言われているわ。何がそんなに楽しいのかしらね。夢中で読んじゃつて

「聞こえているわ、アイシス。

僕の陰口なら、まず僕の部屋から出て行ってからすることだ。少なくとも、僕がいないところで、どうぞ」

「あら、分からない?

あなたに聞こえるよつて、わざと言つて居るのよ」

アイシスが言い返すと、ヴィッツは不機嫌な顔をして、再び魔法書に視線を落とした。

「ね? すぐ人に無視するでしょ?」

「そうだな。……でも。

彼がそういう人でも、それで彼がみんなに嫌われていようと、それでも、君は彼が好きなんだろ?」

「……っ」

翡翠の瞳が大きく見開かれた後、
彼女の白い頬が、パッと赤く染まつた。

「みんなには趣味が悪いって言われるの。
顔は綺麗だけど、中身がああだから。
それにちつとも構つてくれないの。
デートなんてとんでもないわ。

一緒に出かけたこともないの。

……でも、可愛いところもあるのよ」

アイシスはにこりと微笑んだ。

彼女の「可愛い」ところも「ここに言葉には、
賛同しがたいけれど、

おやじく祖父をずっと支えてきたのは彼女なのだろう、と思つた。

誰か一人でも理解者のいる者は強い。

どこにでも行けるし、何だつてできるからだ。

それは、必ず元の場所に戻つてこられる力を、
自分の理解者である存在が与えてくれるからだ。

アイシスは…、

祖母は、俺が5歳の時に病死した。

祖父にはこんなにも強い支えがあつたのだとしたら、
それを失つて、暗い森に独り籠もるようになつたわけも分かる気が

した。

俺は黙々と読書し続けるヴィッツの背中を見やつた。

「彼は何を研究しているんだ?」

「何かしら?

強力な魔法を探しているみたいだけど……」

「強力な魔法?」

「ええ。こここの授業では教えてくれないような、
そんな威力が強い魔法を探しているみたい。
だから、古代魔法書ばかり読んでいるわ」

そう言えば、と、

アイシスは自分の唇に人差し指を押し当てた。

「ヴェルナーから借りた魔法書はどうしたのかしら?
先日まで片時も手放さなかつたのに、
いつの間にか持っていないし、部屋のどこにもないのよね。
ヴェルナーに返したのかしら……?」

「ヴェルナー?」

「ヴェルナーは眠り森の領主よ。
ヴェルナー・」・クロイツェン。
私以外でヴィッツに話しかけてくれる稀な人ね。
貴重な存在だわ」

「へえ」

「ヴェルナーは貴族だから、
ヴィッツの研究に援助もしてくれているの」

「援助？」

「そう。いろいろとね…。
先日の魔法書も、そう。
埃の被つた本でね、薄っぺらい本だったけれど、
すごく貴重な物だつて言っていたわ。
だから、ヴィッツがちゃんとヴェルナーに返したかどうかが、心
配で…」

「その本なら返した」

素つもない声が響いた。

「あら、 そうなの？」

アイシスがヴィッツを振り返る。

「そうとう危険な方法で手に入れた本らしかったからね。早めに返してやつたんだ。

内容はすべて頭の中に入れ終えたことだし……」

「と言つことは、

「その本は役に立つたつてことかしら？」

「大いに。ヴェルナーにしては上出来だつた。彼が今回ほど僕の役に立つたことは無いね」

「ちゃんとお礼を言つたのかしら？」

「礼？　なぜ？　

彼は僕の役に立つてこそ当然なんだ。

それなのに、いちいち礼なんて言つてられるわけがない」

「ヴィッツ……」

呆れ声が響いた。

だが、そんなことお構いなし、
ヴィッツは、さあ、と言つて席を立つた。

「これで良いはずだ。広範囲効果の魔法を、
単体対象の魔法になるように呪文を変えてみたし、
威力も僕の魔力に合わせたものにしたし、
きっとうまく行くはずだ」

喜々として瞳を輝かせているヴィツツを、
俺はアイシスと共に、啞然として見上げた。

11・好みの問題か、これは……？

魔法式が分かつたー、

と叫んだ後のヴィッシンの行動は早かつた。

俺はもちろん、アイシスさえも放り出して部屋から飛び出していく。

そのため、

アイシスと俺は必死に彼の後を追いかけなければならなかつた。

「なんなんだ、 いつたい！？」

「新しい魔法を使ってみたくて仕方ないのね。 可愛い！」

「え！？ ビニが可愛い！？」

「あら、 だつて、 子どもみたいじゃないのー！」

「ビニが！？」

廊下を走りながら、 アイシスと俺は大声を出し合つ。 そこで俺はこの時、 ばあちゃんの好みを激しく疑つたわけで……。

いや！ でも！

ばあちゃんの好みがこうだったから、俺の父親が生まれたわけで、俺も存在しているわけだから、……いいのか？？？

なんて、ぐるぐる考へてゐる間に、ヴィッシュの背に追いついた。ヴィッシュの足が止まつたのだ。

「ドレイク！

今日こそ決着を付けよひじゃないかっ！」

喜々として指差す相手は、小麦色の肌をした少年だった。

ダークエルフだ、と一目で分かる特徴。

黒髪の下から覗く瞳は、湖のように蒼い。

年齢は、ヴィッシュよりいくつか年下に見える。

「彼は？」

ヴィッシュが今にも戦闘態勢に入りそつたので、アイシスと俺は少し距離を取つた。

「……まあ、ティファーレト寮の真ん前。

エントランスから、何事かと覗く寮生の顔が見える。

「彼はドレイクよ。嘆き谷の領主の息子なの」

「嘆き谷!…?」

「あら、知っているの?」

エルフなのにアルカウムの地理に明るいのね

「偶々聞いたことがあっただけさ」

偶々……。

嘆き谷は、祖父ヴィッツが魔法を放ち、
その地で暮らす者たちすべてを一瞬で消し去ったところである。

嘆き谷の領主の息子だといいでドレイク。
……これは偶然なのだろうか。

「ヴィッツはドレイクに向をじよづつて言つただ?」

「こつものじよ。遊んで欲しいの」

「遊ぶ？」

しかし、ヴィッツとドレイクの間に流れる空気は不穏である。2人は互いを睨み合い、黙して間合いを計っているように見える。

「ヴィッツってば、ドレイクのことが大好きなの。
好きで、好きで、好きで、堪らなく好きなの。
でも、その想いをどうしたらいのか分からぬみたいね。
だから、ああして、勝負を申し込んでいるの。
ほぼ毎日のように、ああしているのよ。

ですって。

ジーラでも構わないのだけど、何かしなければ必ずうずくまってしまうのね。

自分の方に振り向いて欲しくて堪らないのよ。

不器用で、天邪鬼なの。……ね！ね！可愛いでしょー！」

「いや、ちつとも……」

不意打ちでイグーとか…
下手したら大怪我するんですけど。

そういうじてている間に、ヴィッツの手のひらから火花が散った。

彼は何かを口の中でも呑み、指先で魔法式を描いた。

一方、ドレイクの方も魔法式を描く。
あれはおそらくブロンドの魔法式だ。

ヴィッツは左右で別々の魔法陣を描きながら、
やがて左手をかざし、
ドレイクが放ったブロンドを左手から生み出した魔法で打ち払った。
右手は淡い輝きを保つ。

それを見たドレイクは、イグニマの魔法式を描き始めた。

「この決着つて、いつもひっさしひつて着くんだ？」

「ヴィッツが負けるの」

「え？ 負けんの？！」

「そうよ。そして、とっても悔しがるの。
次こそは倒してやるって捨て台詞を吐いて去るのよ。
そして、翌日こまよに再戦を申し込んで……その繰り返し

「ドレイクはそんなに強いのか？」

「強いわ。……でも、ヴィッツは天才よ

言って、

アイシスは振り返り、にっこりと微笑んだ、

「言つたでしょ？ ヴィッツはただ構つて欲しいだけなの。

勝つてしまつたら、次に勝負する理由がなくなつてしまつじやない。

構つて貰えなくなつてしまつと思つてているの」

「普通に友達になればいいだろ？」

「その“普通”ができないのがヴィッツなのよ」

バチン、と何かが弾き飛んだ。

それは、ヴィッツの右手から放たれた魔法で、
その音から、それが不発だつたことが知れる。

「……」

ヴィッツが石像のように固まつたのは、じくじく僅かの間。
くるりと踵を返すと、彼は駆けだした。

「覚えてるよ！ 次こそは、ぶつ殺してやる……！」

叫び声と共に遠ざかっていく背中を、

俺は再び、アイシスと共に追いかけるハメになつた。

ふと、ヴィッツが置き去りにしたドレイクを振り返つた。すると、多くの友人達に囲まれた少年の姿が見えた。

それは、自室に駆け込み、大きな音を立てたその扉を閉めた。ヴィッツとは、対照的な光景のよつに思えた。

「ヴィッツ、入るわね」

返事など、どうせ戻つて来やしないのだと、

アイシスはノックもせずに扉を開き、ヴィッツに歩み寄つた。

「僕の計算はあつていたはずだ！」

入るなり聞こえてきた声に、俺はビビー、
アイシスは苦笑を漏らした。

「今日」こそは勝てるはずだつたんだ！

魔法式は完璧だつた。マテリアルもあつていたはずだし、この僕が呪文を間違えるなんてありえない。

なのに、なぜ…。ああ、なぜ勝てないんだ。あのダークエルフに。僕はもうダメかもしれない。あんなダークエルフに負けるなんて。いつたい何年ここで学んでいると思っているんだ。

それなのに、僕はまだまだ未熟だ。

ああ、未熟すぎて、自分が心から腹立たしい。

嫌気すら覚えるね。居たたまれない。そう、居たたまれない。

消えて無くなつてしまえばいいんだ、僕なんて…」

頭を抱えて床に倒れ伏すヴィッツを、俺は唾然として見下ろした。

「ええつと…」

ほらね、とアイシスが目配せをした。

「とても悔しがっているでしょう?」

「でも、わざと負けたんじゃないのか?」

「まさか。わざとなんて負けないわよ。本気よ。ヴィッツはいつでも本気なのよ」

「でも、さつや…」

「あれは無意識。
もしくは、本気だからこそ勝てないの…」

分かるようで、分からないと、俺は眉間に皺を寄せた。
すると、アイシスは、見ていて、と小声で言つて、
床に膝を着くと、

ふわりとヴィッツに覆い被さり、その体を両腕で抱き締めた。

「大丈夫よ、ヴィッツ。貴方は天才ですもの。
次に勝つために今日は相手に勝ちを譲つてあげただけなの。
それに、今日負けたおかげで、貴方の探求心は損なわれなかつた。
明日勝つために貴方は研究を続けるのでしょうか?」

「負け続ける僕には存在価値がない」

「そんなことはないわ。

私には貴方が必要ですもの」

「…………アイシス。そここの本を取ってくれ」

「分かつたわ」

にっこりとして、アイシスは体を起こし、
ヴィッシュの机から魔法書を一冊手に取ると、
床に伏したままのヴィッシュに差し出した。

すると、ヴィッシュはそれを広げると、
『うんと寝返りを打つて、そのまま読書を始めてしまった』

アイシスが振り返る。

「これでこつも通りよ」

「え…。ええ? ? ?」

「復活したから大丈夫ってこと。
話しかけてみるといいわ。

返つてくるのは皮肉ばかりだから」

彼女はくすくすと笑つた。

「ね？ 可愛いでしょう？」

12・それは貴重だと、彼は言ひ。

危ないと思った。

ばあちゃんの明るさに惹かれつつあるのも、
じいちゃんが、俺の知っている“クソジジイ”とあまりにも掛け離
れていて、

うつかり“面白い”と思ってしまうのも、
ここに来た本来の目的を忘れてしまって、危うい。

何のためにジルベルトから時を渡る幻薬を貰ったのか、
もう一度、思い直してみなければならなかつた。

まず第一に、祖父を知ること。

俺は祖父のことを知らなすぎるから。
恐れ、従うだけの対象である限りは、
彼の心を理解することはできないだろう。

そして、次に、

祖父に禁忌魔法を使つよう命じた者がいるはずだから、
その人物を調べること。

なぜ、祖父はその人物に従うのかも、できれば知りたいと思つ。

そして、最後に。

もし可能であれば、魔法を使おうとする祖父を止める」と。

それができるのであれば、何もかもがハッピーエンデになる」とは疑いようがないのだけど……。

俺は魔法書に没頭するヴィッツに視線を向けてから、アイシスを見やつた。

「ヴィッツはドレイクに勝ちたくて研究をしてるのか？」

「そうね。それもあるのだと思つわ。

ただの探求心ってこともあるでしょ」けれど。

やっぱり新しい魔法を使えるようになつたら、試してみたくなるものですね。

ドレイクに試して成功したら、

ヴィッツにとつての“成功”なのかもしれないわね」

「ヴィッツはドレイクのことが……その……好きなんだよな？」

「ええ。大好きよ」

躊躇しながら口にした俺の言葉を、

アイシスは何でもないことのようにあつせつと肯定した。

「きつかけは何だったかしら。他愛も無いことだつた気がするわ。ヴィッツが新しい幻薬を作つていた時に、その魔法式で悩んでいて、そこに通り掛かつたドレイクが、何か一言言つたみたい。……詳しいことは知らないんだけどね。でも、その一言がヴィッツにとつて、目から鱗が落ちる一言だつたらしくて、

それからなのよ。ヴィッツがドレイクに執着するようになったのは

「へえ」

「自分にはない考え方を持っている人は貴重だとか、自分とは異なる考え方ができる人は大切だとか何とか…。常に“はい、そうですね”って言われるよりも、“それ違うんじゃない?”って言われることが、ヴィッツは大事だつて考えているみたい」

「それは…分かる気がする」

「そう?」

アイシスはにつひつと微笑んだ。

「そういうわけで、ヴィッツにとつてドレイクは特別な存在だつてことに間違いはないわ。もつと彼と話したい、彼の言葉が聞きたいと思つてゐるのでしうけれど、

天邪鬼なヴィッツにはそれを言つことができなくて、代わりに口にしてしまつのは“次こそは殺してやる!”なのだから、

本当にどうしようもないわよね

「アイシス、いりむさい」

本から視線を上げ、ヴィッツがアイシスを睨み付けた。

「君はなんてうるさい女なんだ。

そして、なぜ僕の邪魔ばかりをするんだ？
だいたい君はいつもいつもどうしてそんなに話す言葉があるんだ。
まるでしゃべるために生まれてきたようだな。
何が楽しくてそうペラペラと、

あることないこと勝手にしゃべっているんだ。

君が口を閉ざしやえすれば、僕の研究はもつとはかどるはずなんだ。

そう。君が僕の部屋を掃除しようだなんて思わなければ、今ごろ僕はドレイクをぶち殺し、勝利の酒を味わっていたはずだ。
それから君は、昨日、僕にいつたい何を食わせたんだ？
夕食だとつて僕の口に無理矢理突っ込んだアレの味が、未だに舌の上に残つているようで、僕の集中力はガタ落ちだ。
そうでなければ、こんなにも君の存在が気になるということはなかつたはずだ。

あー。そいか。そいつもいたな。ベルタとかいう…。

僕の部屋に僕以外の者がいることに堪えられない。

どうでもいいから、早くどこかに行ってくれないか？

僕の部屋から出て行つてくれ」

啞然とした。

それでいつたい俺はびりしたらいのかと、アイシスを振り返つた。
部屋を出て行けと言われたからには出て行かなればならないのだ
ろうか。

だけど、俺はヴィッシュから離れるわけにはいかない。

それこそ何のためにここに来たのか分からなくなつてしまつからだ。
せめて彼女がヴィッシュの言葉を退けて、
部屋に残つてくれたのなら、俺も居つゞけることができるのだが…。
そんな俺の思いなど知らないアイシスは、
すくつと立ち上がり、ヴィッシュに向かつて肩を竦めた。

「わかったわ。つるさい女は退散します。

だから、どうぞ研究に没頭してくださいね！

ふん、と鼻を鳴らすと、あつさつ部屋を出て行つてしまつた。

俺も出ていくべきだろつか。

だけど、ここで出でてしまったら、

もう一度と、ヴィッシュの部屋には入れないような気がして、足が動かない。

結局、俺はその場に立ち去ってしまった。

しばらくあって、ヴィッツが本を傍らに置き、体を起こすと、俺の方に鋭い視線を向けてきた。

「……それで？」

「え？」

「君は何者なんだ？」

「……」

そのためにアイシスを追い払ったのではないかと思わせるような沈黙。

俺は口が利けなくなり、ただヴィッツの緑色の瞳を見つめた。

13・ただ彼に自分を知つて貰いたかつただけ

思えば、

その時初めて俺は彼の瞳に映つたよつと思つ。

彼は俺を正面から見つめ、
俺も彼を真つ直ぐに見つめた。

「俺は……」

半分白状していたと思う。

だが、全部を白状できなかつたのは、
彼の瞳が大きく見開かれたからだ。

「あー…そうか。わかつたぞーー！」

「えええつー？」

「なんだ、そうだったのか。
こんな簡単なことに気付かないなんて、僕はどうかしているーー！」

ヴィッシュは、ぱっと身を翻すと、机に向かい、
ものすごい勢いでメモを取り始めた。

彼の周りに書き殴られた紙切れが散っていく。

「なんだ。簡単なことじやないか。

分かつてみると、じつにくだらない。

僕はなんてくだらないことで悩んでいたんだ

魔法式を書き殴った紙を、ヴィッシュはぐしゃりと握り、
爛々と瞳を輝かせながら立ち上がった。

「今度はアドレイクをぶち殺してやれるー！」

それは先程のリプレイだった。

もはや俺のことなど眼中に無く、

彼は何もかもを放り捨てる、部屋から飛び出していった。

そうなると、

俺も彼に合わせて先程と同じことを繰り返すしかない。

つまり、ヴィッツを追つたのだ。

彼は自分の部屋を出ると、ドレイクの部屋の扉を叩き、留守だと知ると、一階のサロン、それから、食堂に向かった。

そこでもドレイクの姿を見つめられないと寮の外へと飛び出した。

行き着いた場所は寮の裏の森。

広大な森の中、まるでヴィッツにはドレイクを探し出すことのできる術があるかのようこそ、彼は木々の間を駆け抜けた。

「ドレイク！」

その姿を見つけるや否や、ヴィッツはブロンを放った。

ダークエルフ特有の小麦粉色の肌をした少年が、驚いたように振り返り、湖色の瞳を一瞬大きく見開かせると、地面を転がるようにして、ヴィッツが放ったブロンを避けた。

闇で染めたようなドレイクの髪が、
ジリリと僅かに焦げて、嫌な臭いをさせる。

ヴィッツは軽く舌打ちした。

「今日こそはぶつ殺してやる！
僕の新しい魔法を受けてみるとこよ」

ヴィッツの人差し指が空で魔法式を描く。
と同時に、彼は呪文を唱え始めている。

ざわりと、胸が騒いだ。
体の奥が疼く。

悪い予感がした。

その魔法は使つてはならないと、頭の中で警報が激しく鳴っている。

「やめろッ！ ジジイ！！！」

絶叫。

だが、それは爆音に重なり、そしてかき消された。

カツ、と視界が白い光に覆われた。

眩しさに目を閉じると、瞼の裏側にまで光が射し、
真っ赤になつて見えた。

一度閉ざした瞳はそのまましばらく開けなかつた。

沈黙。

やがて雑音が帰つてきて、俺はようやく瞼を開いた。

信じがたい光景だった。

円形にハゲた草地のその中央に黒い影が焼き付いている。

それは人影であるのは間違ひよつにないのだが、影の主の姿がないのだ。

「ドレイク？」

弱々しい声が響いた。

ヴィッツはその影が焼き付いた地面に駆け寄ると、膝を折って、崩れるように地面に伏した。

「ドレイク！ ドレイク！ こんなのは嘘だ！」

きつとビームに隠れて僕を驚かせるつもりなんだな。

そうでなければ嫌だ。なんて！ ビームして！

こんなことがあっていいはずがない！

こんなつもりではなかった。

そう嘆きながら地面に拳を叩きつけるヴィッツ。

その姿を見つめながら、俺は理解した。

ヴィッツの魔法が成功してしまったのだということを。

凄まじい光熱を浴びたドレイクは、その影を地面に焼き付けて、灰となつた。

ヴィッツがその才能を認め、羨み、妬み、そして愛した彼はもはやどこにもいないのだ。

殺してやると口癖のよつて言つてきた。

けれど、一度たりとも本氣で死んでほしいと願つたことはない。

ただ彼に勝ちたかつただけ。

いや、勝つことが目的ではなかつた。

ただ彼に自分を知つて貰いたかつただけなのだ。

自分が彼を認めているように、彼にも自分のことを認めて貰いたかった。

同じだけ。

同じ気持ちを返して貰いたかつた。

ただそれだけのこと。

だけど、それが何よりも困難なことで、自分には相手を傷つける術しか持たない。

だからこいつするしか自分にはなくて、
何度もやり直しても同じことを繰り返すだらけ。

彼が好きで、

彼に近付きたくて堪らない気持ちを抑えきことができないから。

だけど。

ヴィッシュは嘆き叫んだ。咽が裂けるほど。

こんなはずではなかつた！

「エルヴィン？」

ヴィッジを呼ぶ声に、ハツとして俺は振り返った。

青年だ。

身なりの良いエルフで、一いち方に歩いて来るその流れのような仕草から彼が貴族であることが窺えた。

「素晴らしい！」

青年は辺りを見渡して、ヴィッジに歡喜の声を浴びせた。

「エルヴィン、君は素晴らしい！わたしの見込み通りだ。あの魔法書を苦労して手に入れた甲斐があった。君は見事あの魔法を使いこなせたというわけだな」

「……ヴェルナー……」

ヴィッツは怠慢な動作で青年に振り返り、彼の名前を呼んだ。
ヴェルナー・Ｌ・クロイツェン。
眠り森の若き領主だ。

「実に見事だ、ヴィッツ・エルヴィン！

あの魔法は1000年前に捨てられた魔法だつたんだ。
こんなにも圧倒的で、こんなにも偉大な魔法であるにも関わらず、
だ。

何千、いや、何万という生命を一瞬で奪える魔法は、
この魔法の他にないだろ？

「黙れ、ヴェルナー！」

ドレイクがつ。ドレイクが……死んだ……つ

「それがどうした？」

「なんだと……？」

「ヴィッツ、君は知っているはずだ。

今の魔法に対となる魔法があることを

「……」

ぞくりと背筋が寒くなつた。

それは甦りの魔法。

1000年前のエルフと、ダークエルフの戦いで使われたとされる魔法のことだ。

戦争の終焉。

その直前で使われた魔法は、

殺したダークエルフの屍をオークに変え、操るというものだった。

アルヘイムの魔法使いに操られたオークは、元は自分の親、兄弟、子であり、仲間、

同朋であったダークエルフたちを次々に襲い、殺していった。

これには、ダークエルフたちも涙が枯れるほどに絶望したが、心あるエルフたちも非難の声を上げた。

そして、戦争は終わったのだ。同盟といつづのトニー。

死者を蘇らせる魔法は、

ソレンティアの最初の授業で読まされる『基礎魔法大全』に載つて いる通り、禁則魔法である。

固く使用を禁じられている。

だが……。

ヴィッツは、ドレイクが地面に焼き付けた影を見下ろし、じっと考え込んでいる。

(ダメだ、ジジイ……)

今度こそ止めないとつ。

彼は人を殺した。

もはやそれだけで後戻りのできない場所に来ている。
だけど、死者を蘇らせてしまえば、さらにもつと……。

二度と、戻つてこられない。

彼を。
自分を。

彼がこれから殺すであろう人々を。

……救えない。

俺はヴィッツの肩を力一杯に掴んだ。

「やめろッ。それだけはダメだ！」

「ドレイクが死んだんだ！僕が殺した！」

「それでもっ。……それでも死者を蘇らせてはいけない」

「いけない？ 禁忌だと言いたいのだろう？」

そんなこと分かっている！

分かつて言っているんだ！！！

分かつてる…それでも。それでも、僕は彼の顔を、もう一度見た
いんだ。

彼の声を、もう一度……っ

止めることなんて、無理だ。

最初から不可能なことだったのだ。

何度も同じことをやり直しても、
彼は同じように繰り返しだらう。

ヴィッツは魔法式を描き出した。

「ドレイクをオーク『魔物』なんかにはさせない。

僕は天才だ。魔法式の書き換えなんて簡単だ。

彼を、元通りの彼のまま生き返せせてみせる

「の」

自分は天才なのだ、と繰り返す彼の声は震えていた。
魔法式を描く指先も、腕でも、肘も、肩も、
まるで真冬の野外に薄着で放り出されたかのように、
ガタガタと震えている。

俺はそれを見ていることしかできなかつた。

やがて、魔法式を描き終え、呪文を唱え終えたヴィッツが、両手を地面上に着いて、焼き付いた影に向かつて叫んだ。

「帰つてこーーーレイクーーー！」

禍々しいとか、不吉な感じはしなかった。

そうかと言ふ、

神聖な感じも、喜ばしい感じもしない。

ただ、空虚で。

心こ、

ぽっかりと穴があいたかのよつこ、虚しい。

黒。

いや、白。

色の無い力が下の方から、
ずっと下の方から迫り上がってきて、

強く強く何かを押し上げてくれる。

畏れを抱いたのは、それが禁忌だからだらうか。

「ぐりと、ヴィツツの咽が鳴る音を、俺は聞いた。

畏れを抱く俺に對して、彼は期待を抱いているようだつた。

地面に黒く焼き付いた影が盛り上がり、
やがてそこから手が生えてきた。

いや、違う。

生えてきたのではない。

それはまるで生き埋めにされた人が土から這い出でてくるかのようだ
つた。

「ドレイク……？」

蘇った彼に、ヴィツツは恐る恐る声をかけた。

彼は瞳を瞬かせる。

そして、小さく唇を動かした。

「……ヴィッツ……」

彼は戸惑つ瞳で、ヴィッツを見つめた。
その様子は、自分が死んだことも、
生き返つたことも理解できていらない雰囲気だ。

「ヴィッツ……お前、俺に何をしたんだ？」

ドレイクの問いに、ヴィッツは頭を振った。

「いいんだ、君は。いい。
君は何も心配しなくていいから……」

「ヴィッツ?」

大きく頭を振つたヴィッツの襟元がはだけて、
その首もとに黒く醜い痣が浮かび上がつていぐのが見えた。

同じ痣だ。

そう思い、俺は自分の右肩を掴んだ。
だが、それは“同じ”ではなかつた。

ヴィッツの痣を指差して、ヴェルナーが告げる。

「それは印だ。禁則魔法を使つた者の罪の印」

「禁則魔法だと？」

「ヴィッツ、お前、なぜそんな魔法を…」

信じがたいものを見るかのように、ドレイクがヴィッツを見つめる。

「先生たちに相談をしよう。その印を消せるかもしれない」

「待て、ドレイク。

教師に告げれば、ヴィッツはソレンティアを追われるだろう。彼はそれだけのことをしでかした。

ソレンティアを卒業しなければ、故郷で魔法を使えない。ヴィッツがこれまでここで学んできたことはすべて無と化す

「だから、なんだ？」

「「」の「」とは、君とヴィッツとわたしの秘密にしようじゃないか。

……これはヴィッツのためだ。

君は、ヴィッツのおかげで蘇った。 そりだらう?」

「……蘇つた?」

「そりゃ、君はヴィッツに殺され、
ヴィッツによつて生き返つたんだよ」

「……ヴィッツ……。 なんのことを…」

ヴィッツは口の手を見下ろしていた。

今更ながら自分がしでかしたことが分かつてきた様子だった。

ソレンティアを追われたら、もう一度と魔法は使えない。
それがヴィッツにとってどれほど重たいことなのか、
俺には計り知れなかつたけれど、

彼は1~2の時にソレンティアに入学して、

それから10年以上もここで学び続けてきたのだといつ。

天才だと言われ、

そう言われるだけの魔力と知識を持つている。

ソレンティアを追われたら、それらをすべて失うのだ。

4つの世界に存在する魔法使いはすべてソレンティアの卒業生である。

ソレンティアを卒業すると、

ルティアマスター
資格修士の称号が得られ、

またこれは一人前の魔法使いになつた事の証明書であるため、資格修士の称号を取得することなくソレンティアを出た場合、もとの世界に戻つた後、魔法を使うことができなくなるのだ。

どういう仕組みなのかは知らないが、卒業せずにもとの世界に戻つた者は、

何らかの力が働いて魔力を失つてしまつららしい。

今まで積み重ねて来たものを壊せるか？

一度、手にした力を手放せるか？

積み重ねてきた年月が長ければ長いほど、壊すのは容易ではないだろうし、手にした力が強大であればあるほど、手放すのは、我が身を引き千切るほど、辛くなるだろう。

ヴィッツはドレイクに向かつて、深く深く頭を下げた。

「お願いだ、ドレイク。
このことは誰にも言わないでくれ。
秘密にして貰いたい…」

何も壊せず。
何も手放すこととは、できなかつた。

16・力は兇悪で、恐ろしい。

完璧な人なんていない。

いつも正しくて。

間違ったことは言わないし、
間違った行いもしない。

そんな人はいないのだと、その時、俺は思い知つた。

目の前で、若き祖父が、
ドレイクに向かって膝を折り、頭を下げ、
今にも泣きそうな震える声で懇願している。

人は、弱い。

力は兎も角も、恐ろしい。

止められなかつた。

それでは、

なんのために俺は時を越えてここにいるのだろう。

「聞いたかい、ドレイク？

それで、どうする？」のことを誰かに告げるかい？

「……」

言えるわけがない。
ヴィッジンの継るよがつな瞳を見つめながら、ドレイクは頭を左右に振
る。

「俺は……なんだか、魔法が怖くなつた……」

「ドレイク?」

「……嘆き谷に帰りたい……」

「帰りたい? まさか…」

「明日、学生課に退学届けを出す」

「ドレイク!」

そんなことをしたら、一度と魔法を使えなくなつてしまつ、
とヴィッツの表情が訴えている。
しかし、ドレイクはすでに決意を固めてしまつたかのようだつた。

「俺はお前とは違つ。

だから、俺には魔法なんて必要ないんだ」

「必要ない…?」

「安心しろ、ヴィッツ。今日のことは誰にも話さない。
それに、アルカウムに戻つたら、会つこともないだらけ」

「もう……会えない…?」

自分は一度死んだのだ。

そして、ヴィッツの禁則魔法によつて生き返つたのだ。

そんな事実、

ドレイクは一刻も早く忘れ去りたかったのだろう。

ソレンティアにいれば、ヴィッツと顔を合わせることになる。
彼の顔を見れば、思い出してしまつ。

ヴィッツが禁則魔法を使ったことも、
自分がそれにより蘇つたことも。

耐えられない。

短い別れを告げて、ドレイクはヴィッツのもとを去つていいく。

その後ろ姿を、無力なヴィッツはただ見送つた。

さてと、と動き出した人物がいた。
ヴェルナー・L・クロイツェンだ。

彼はヴィッツに歩み寄ると、

膝を着いて、地面に両手を着いて頃垂れているヴィッツの顔を覗き込んだ。

そして、その耳に吹き込むように囁いた。

「君はわたしの口を塞ぐために、何をしてくれるだらうか?」

「……」

「わたしは君のために、
かなり危険な手段を使って魔法書を手に入れてあげたね。
それは君にわたしたちの願いを聞いて貰いたいからだよ」

「願い? わたしたち?」

青ざめた顔を上げて、ヴィッツはヴェルナーを凝視した。

「ダークエルフは醜い。

野蛮で、礼儀を知らず、我々エルフに比べ知能の低い

「……」

「そんな種族が妖精界の半分近くの大地にのさばっているなど、
許されることではない。 そうだろう?」

「……何を……言つてゐる?」

「分からぬいか?

あの黒いヤツらを根絶やしにしたいって言つてゐるのぞ。
君にはその力がある。わたしたちには君のその力が必要だ」

「アルカウムとの戦争を望む組織があると聞いたことがある。
ヴェルナー、貴様もその一味か!」

「ひどい言い様だな。まるで悪の組織みたいではないか。
わたしたちは正義の名の下に戦いを望んでゐるのだ」

「何が正義だ」

「ヴィッツ、君に拒否権がないことを忘れてはいけないよ。
わたしの一言が、君から魔力を奪うことになるのだから」

「……」

「わたしたちの力となってくれるね?」

17・先に謝りおぐ。すまない。

抜け殻のようなヴィッツの背を、
俺は黙つて見下ろしていた。

ドレイクが去り、
ヴェルナー・」・クロイツンも去った。

ドレイクはヴィッツとの縁を断ち切つて去つたが、
ヴェルナーは、ヴィッツに無数の鎖を巻き付け、
心も体も、身動きが取れないようにしてから去つていった。

鎖を断ち切る術があるで無いわけではなかつた。
ヴィッツが魔法を捨てればいいのだ。

そうすれば、彼が数十年後に、

嘆き谷のダークエルフたちを皆殺しにする事はなくなるだらう。
禁忌を犯した罪は消えないが、
殺した魂から受ける呪詛を体に刻み、
孫にまでそれを受け継がせる事はなくなるだらう。

だけど、ヴィッツにはできない。

魔法は捨てられない。

「僕には、人として優秀な兄がいるんだ」

ぱつりと、ヴィッツが言った。

俺を見つめ、手招くと、

まるで独り言のようなそれを続けた。

「兄はいつも笑っていて、誰からも好かれているんだ。
とにかく明るくてね。」

彼としゃべると、みんなが笑顔になるんだ。
僕の方が彼より成績は優秀のはずなんだけどね、
みんな、彼を頼りにする。
彼には……勝てない……」

「だから、魔法に拘るのか？」

「いいでは“天才”でいられるからな」

ヴィッツは苦笑を浮かべた。

「両親を喜ばせるよくな話をしてくてもいい。」

気の利いた冗談を言つたために、頭を悩ませる必要もないし、可笑しくも楽しくもないのにケタケタと笑う必要もない。魔法を使える僕は、魔法さえ使えればそれでいいから。それだけで、存在を認めて貰えるから……」

「言おうか、言つまいか、

迷つた末に、俺は口を開いた。

「あなたは、数十年後に嘆き谷のダークエルフを皆殺しにする」

「……なに……？」

「そして、殺したダークエルフたちをオーク（魔物）にして操り、他のダークエルフの村を襲わせるんだ」

「……」

「呪詛を得る。……これだ」

俺は服をめくつて、ヴィッツに体を見せた。
ヴィッツは瞳を細めて黒く醜い痣を見つめる。

「アルカウムの古語だな……」

怪訝な顔。

それから、納得したように頷いた。

「この呪詛は宿主が死ぬと、実体化し、兇悪なオークとなると、ここに書いてある

ヴィッツの指が、俺の皮膚の上を滑る。

「それを防ぐためには、死ぬ前に他者に渡す必要がある、と。
……君は僕の何だ？」

「孫だよ、ジジー」

「なるほど……」

ヴィッツは僅かに考えると、ゆつくつと頭を下げる。

「先に謝つておく。すまない」

「なんだそれ…」

つか、知つてたけど、頑固だよな?..」

やはり彼には魔法を手放す気がないのだ。

彼を止めよつとして、

過去にまで來たが、それは叶わなかつた。
だけど、無駄だつたとは思いたくない。

少なくとも俺は祖父という人物を知ることができるやつ。

それは、許せる、許せない、とかいう次元とは、
まったく異なることだけだ。

「俺、未来に戻るよ

「…………考える」

「え?」

「考えておく」

何を？とは問わなかつた。

ヴィツツが、祖父が考えると言つてくれた。

それだけで、とりあえず十分であるように思えた。

どでかい声を出されて、

俺もハイツツも両手で口の目を塞いた。

アイシスは大喜びで、俺とヴィッツの顔を交互に指差した。

「本当に孫なんだ！！！」

「黙れ、アイシス。鼓膜が破けたらどうしてくれる?」

「だつて、最高に面白いじやないの！」

あなたの孫が未来から遊びに来てくれたのよ！」

「いや、遊びには来てないから」

「ちなみに、ヴィットと結婚した奇特な女性はどなたかしら?」

興味津々に見つめられて、俺は閉口する。

不用意に未来を語り、
2人の仲が気まずくなってしまつていけないからだ。

「髪が緑色なのよねえ…。緑髪の女性かしら?」

「これは染めたんだ」

「あら、 そうなの? 地毛は金髪?」

「そうそう」

「なに!? 染めただと!?
ふざけるな。我がエルヴィン家は代々金髪の家系だ。
それを染めるだなんて!」

「でも、綺麗よ? いいじゃないの!」

「もうひとつ言つておく。

我がエルヴィン家は、
数代遡つてもヌメル・アルブムの血しか入つていなからな!」

「だから、何よ!」

どうせ私は、ヌメル・アルブムとアクア・アルブムの混血よ。
悪かつたわね!」

ぎやんぎやん言い争う祖父母に苦笑して、
俺は懐から小瓶を取り出した。

それはトキホタルの光液で作られた幻薬で、
小瓶に未来に戻るためのものだ。

「ベルタ」

アイシスがにつこりと微笑んだ。

「会えて嬉しかったわ」

「俺も」

心から言う。

彼女は俺が5歳の時に亡くなってしまったから。

「また、会おうねー」

親しみを込めて抱き締めてくれた。

それは友人に対する別れの挨拶であつたけれど、
今の俺にはそれで構わなかつた。十分だつた。

ヴィイツツに視線を向ける。

彼も俺を見つめていて、視線が交わると、
気まずいような、くすぐったいような、変な気分になる。
言葉は無い。

ただ、信じるだけ。……良い未来を。

俺は小瓶の中身を一気に飲み干した。

「起きて！　ねえ起きて！」

頭痛がする。

寝過ぎた時のよつた鈍痛が。

氣急げに体を起こし、瞼を開けば、
見知らぬ女性の心配顔が目に飛び込んできた。

「…………だれだ？」

「……ベルタ……」

「あ？」

ふわふわと、癖のある金髪。
ぱっけりと、大きく開いた緑色の瞳。

どこかで会つただろうか……？

俺より年上だろうか。

幼い頃はさぞかし可愛らしかつただろう顔立ちに、
薄く化粧が施されている。

“可愛い”から“美しい”に羽化しつつある女性の顔だ。

「誰……だ……？」

「どうして分からぬの？」

彼女は悲しげな表情を浮かべた。

「私よ、ベルタ。私……。セレナよ」

19・未来の“死”

セレナ。

それは妹の名前だ。

今年、8つになるはずで、
自分より12も年上のはず。

ところが、目の前の女性は俺より年上に見える。
これはいったいどういうことだらうか。

「セレナ…？ 本当に？」

じくさん、とセレナが頷いたのを確認してから、
俺は辺りを見渡した。

俺の部屋ではない。
ヴィッツの部屋でもない。
では、ここはどこだ？

セレナの背後から視線を感じ、それを見やると、
エルフの青年がペコリと軽く会釈をした。

「彼はイヴァン・ゲルツァー。

ここは彼の部屋なの。今はね

「今は？」

「ここはティファレト男子寮405号室よ。

今日、この日にベルタがここに来るつて分かっていたから、
私、待っていたの」

「待つてた？」

「ベルタが過去から自分の時間に戻るために飲んだ幻薬は、
トキホタルの光液の量が適切じゃなかつたの。
多かつたのよ」

「多かつた？ すると、ここは…」

「ベルタにとっては“未来”よ。

15年くらい先の…」

「15年？！」

つてことは、俺、35歳くらい?????

当然、ここにはいないわけだよな。

そうか。ソレンティアを卒業した後か…

「……」

「……どうした？」

表情を暗く、口を重くしたセレナに、俺は苦笑に詫びついた。

ギョシとやる。

「おーおーおーおー… い、どうしたー?」

「うー…」

「セレナー。」

ボタボタと落ちる涙を手のひらで拭つてみると、
セレナは鼻を啜りながら、震える声を漏らした。

「ベルタは… つ、卒業してないつ
ソレンティアを卒業… できなかつたの…」

「げ…。マジか…」

不真面目が過ぎたんだろうか。

授業の出席率が低いのは自覚ある。

勉強よりも遊びの方を重視している自覚も。

それでも卒業はしたいと思つていて、
そこそこ学業もこなしてきたつもりだ。

ところが、卒業できないといつ未来があるところ…。

(くじらじー)

だけど、俺が本気で凹まなければならなことせ、
むしろ、ここからだつた。

ガバリ、とセレナが覆い被さるように抱き付いてきて、
縋るよつて、ぎゅっとしがみついてきた。

「なんで卒業できなかつたのか、聞かないの?」

「卒業許可が貰えないうちに27歳になつてしまつたから?」

「ベルタは27歳になつていないわ。26歳にもなれなかつた…」

「それ、どういう意味だ?」

セレナの指が俺の肌の上を滑つて、呪詛をなぞるような動きを見せる。

もしかして、と思ひ。

「ぐりと匂がなる。

血が。下へ、下へと、引いていくのが分かつた。

「…………死んだ……のか？」

「殺されたの！」

それは予想外の答えたが、自分の未来が“死”であることは、肯定されてしまった。

「殺された？　いったいなんで？　誰に？」

「リングブルムよ」

「リングブルム？」

はたして聞き覚えのある名前だろうか。
いや、初めて聞く名前だ。

では、なぜ、自分はそんな名前も知らないような人物に、
これから殺されなければならないのだろうか。

「誰なんだ？ その……リンドブルムとかいうヤツは」

「リンドブルムは、嘆き谷の生き残りなの」

「嘆き谷の？」

そこは、祖父ヴィッツが滅ぼしたダークエルフの村だ。
生き残りとはどういふことだらうか。

「まさか生き残りがいたのか？」

ヴィッツが放つた魔法は、凄まじい威力を放ち、
ダークエルフたちの命を一瞬で奪つたはず。

あの魔法から逃れ、生き残った者がいたとは信じがたいことだ。

「リンドブルムは赤ん坊だったの」

「だから連れられた？ そうは思えないけど？」

「リンドブルムは嘆き谷の領主の孫だったの。

そして、ヒルフとダークエルフの混血だったのよ」

「領主の孫？ … 混血？」

「父親は嘆き谷の領主ドレイクの息子ブルクハルトで、母親は響き谷の領主フリューゲルの妹イドウベルガ」

(待てよ。その話を聞いたことがあるぞ)

俺はジルベルトから聞いた話を思い出した。

アルヘイムとアルカウムの境に2つの谷がある。ひとつはアルヘイム側にある“響き谷”、もうひとつはアルカウム側にある“嘆き谷”。

この2つの谷に棲む者たちは、

互いの種族を尊重し、平和を強く願い、響き谷の領主フリューゲルは妹を、嘆き谷の領主ドレイクの息子に娶せた。

「さうして生まれたのが……リンドブルムか……」

つていうか！

リンドブルムは、あのドレイクの孫だといつ。その孫がなぜ俺を殺すのだ？

なぜ？

愚問だつた。

ヴィッジがじでかしたことを見れば、

殺されるくらいに憎まれても何う不思議ではなかつた。

20・悲しいが過ぎないと、途方に暮れる

(そうか…)

俺は、リンゴブルムという名の者に殺されるのか

それが自分の未来なのかと、俺は漠然とする。

どことなく思つていた。

幼い頃から。

自分が歩んでいる道は、人よりずっと短くて、
途切れているような気がしてならない、と。

他の道に進みたくとも、一本道で、

別れ道など無く、俺はその短い道を進むしかない。

いつか途切れた場所まで歩き着いてします。

途切れた先は、暗闇。

引き返すことは許されない。

ただ、ただ、決められた速度で道を歩み続ける。

そして、いつか、途切れた道から闇へと突き落とされるのだ。

「ベルタ！」

名を呼ばれて、ハッと正気に戻った。

涙いっぱいの瞳に焦点を合わせて、俺は小さく謝罪をした。

「どうして！ どうしてそうなの！

もつと足掻いてよ！

そんなに素直に未来を受け入れないでよ！

……し、しんじや……いやだよ……」

「セレナ……」

「ベルタには分からぬわ。

ベルタが死んだという知らせを受け取った時の私の気持ちなんて
つ。

信じられなかつた！ だつて、死体すら残らなかつたんですもの

「なんだつて……？」

「これは聞いた話よ。

ベルタはリンドブルムが放つた魔法で、一瞬にして灰になつたそ
うよ。

その場にいた人みんなが、ベルタの死を信じられないくらいに、
それは一瞬で……。

家でベルタの帰りを待つっていた私が、

その知らせを聞いて、とても信じられなかつた気持ち、分かるで

しょ？

「……」

「なぜベルタは死んだのか、どうやって死んだのか、誰が殺したのか、知りたくて、私いろんな手を尽くして調べたわ。幸いなことに、ここに入学することができて、それらを知ることができたの」

そう言って、セレナはきつと唇を噛みしめた。

「私、知ったからには、リングブルムを許さない」

「セレナ……？」

「必ず、この手で。……私の手で、殺してやる。ベルタと同じように、骨すら残らないように粉々に、引き裂いて、引き裂いて、引き裂いて、燃やしてやるんだからつ……！」

「セレナ……」

信じられないものを見るように、俺は妹を見つめた。なんだか、途轍もなく悲しかった。

自分死ぬから悲しいのか。

いや、違う。

自分の死よりも、自分が死んだことで、妹がこんなにも激しい憎しみを負うことになるのかと思つたり、悲しすぎて、途方に暮れてしまった。

21・代わりに魔法を、やめなかつた

「セレナ。

……復讐なんて考えるのはやめないか?」

「無理よ」

鋭いナイフのようこ、セレナはキッパリと言ひ切つた。

「絶対に許せないもの。

……大丈夫よ。心配しないで。

そのためにここで魔力を上げて、たくさん魔法を覚えているんだから。

戦う術は、ちゃんと身につけているわ」

「リングブルムとかこうヤツを殺すために魔法を学んでいるのか?」

「他に理由なんてないわ。

今私は、そのためだけに生きているんだから」

「……」

「リングブルムは今、アルヘイムで投獄されているわ。

ベルタを殺した罪でね。

当然、ソレンティアも強制退学だつたから、彼女は魔法を使えないの。

私が負けるなんて、絶対に有り得ないわ。
必ずベルタの仇を討つ。討てるわ！」

溜息も出なかつた。

俺は祖父が掛けた魔法のせいでの、攻撃魔法がいつさい使えない。
それを残念に思つた時もあつた。

一度で良いから、みんなみたいに格好良いくイグニを放つてみたい……とか。

だけど、今の、……未来のセレナを見ていると、
攻撃魔法なんて使えなくて良かつたと思つてしまつ。

俺の魔法は、誰かを助けたり、

ちょっとした幸せを届けるための魔法でありたい、と。

そして、

セレナの魔法もそうであつて欲しいと、望んでしまつ。

強く。

心が痛いくらい。

「…………セレナ。

俺は復讐や仇討ちなんて望んでいない

「…………」

「そんなことして欲しくないんだ」

「…………わかつてゐる。

たぶん、ベルタならそういう言つんだろうな、と思つてた

「ならー。」

「でもね、ベルタ。

仇討ちってね、残された者の救いでもあるのよ？
お葬式だって、そうでしょ？

人つて、死んじやつたら、おしまいなんですね。
死者が豪勢で盛大なお葬式を嬉しいがるなんて、
遺族の願いでしかないと思うの。

死者のためだと言いながら、結局は、残された者自身のためなの

だからね、とセレナは濡れた瞳で見つめてくる。

「仇討ちも私自身のためなの。

あなたを失つて悲しくて、悔しくて、
もうどうしたらいいのか分からなくて、泣いて、

でも、泣いてもあなたは帰って来なくつて。

誰かが憎くて、やるせなくて、

暴力的な気分が押させ切れなくて。

何もかも壊したくなつて、いつそ私もあなたの後を追おつかと思つたの。

そんな気持ちに区切りをつけるために、私はリングブルムを殺すわ。

彼女を殺したら、きっと前に進める。生きていかないと想つから

何も言えなくなつた。

気持ちは分かる……それくらいしか。

それでも、やつぱりやめてくれ、と囁ひべきか。

いや、そういうのは簡単だ。

だけど、セレナはやめないだろ？

俺が同じ立場なら、きっとやめないだろ？から。

「セレナ。……抱き締めて、いいか？」

「…………うん。……抱き締めて欲しい」

13歳年下のはずのセレナは、23歳になつていて、
20歳の俺よりも年上で、

俺が予想していた以上の美人になつていて、
8歳のセレナをいつも抱き締めているよつとひまぜんぜんいかなかつたけれど、

俺は彼女を包み込むよつと抱き締めた。

「……死なないで」

「……」

「一度、起きてしまつた過去は変えられないわ。
でも、まだ起きていない未来なら変えられるかもしねりの。
たぶん、そのためにベルタはここに……未来に来たのよ」

体を離して、セレナは懐から小瓶を取り出した。

「トキホタルの光液でつくつた幻薬よ。
ベルタをもとの時代に戻してくれるわ。
……どうか、死なないで。
……お願いだから、リンドブルムには近付かないで」

どうすれば、助かるのか。
どのように行動すれば、死なずに済むのか。

そんなこと、誰にも分からない。

だけど、俺を殺すのはリンドブルムだ。
ならば、リンドブルムとさえ出会わなければ、死なずに済むのでは
ないだろうか。

そう言いつと、セレナは俺の手に小瓶を乗せた。

「ベルタがもし私をこんな風にしたくないのなら、
絶対に死んではダメよ。
どんなことをしても、
どんな風になってしまっても、必ず生きて。
生きて帰ってきてー！」

セレナの頬を云うものを指先で拭つて、
俺は何だか謝罪したくなつた。

帰つて来られなかつた未来の自分の代わりに。

「…『めんな。帰つて来られなくつて。
悲しい思いをさせたな。すまなかつた。
…だけど、『俺』さちゃんと帰るから。
必ず帰るよ、セレナのもとへ。……愛してる』」

「うん。私も愛してるわ。……お兄ちゃん」

約束ね、と小指を絡めた後、
俺は小瓶の中身をひと息に飲み干した。

ぱちつ、と瞼を開くと、そこは見慣れた部屋。

“おもちゃ箱みたいな部屋ね”と言つてくれたのは、はたして誰だったか…。

「起きたの?」

思いがけない声が響いて、俺は跳ね上がるよつに体を起した。
声の主を凝視する。

「え…？ なんで、『元気』…？」

もはや、何日も、何週間も以前の話のような気がするが、俺は過去に飛ぶ前に、たしか俺の体を隣人に頼んだはずだった。

なのに、なぜ、隣人の姿は無く、代わりに彼女が目の前にいるのだろうか。

「私じゃあ不満なの？」

「ルーリーなんて。……ただ、びっくりしただけだ」

ベッドから足を降ろして、そのままそこに座る。すぐに立ち上がらなかつたのは、立ち上がりがれなかつたからで、時を越えたせいなのか、くらりと目眩がした。

「具合悪いの？」

心配げな青い瞳に、俺は緩く頭を左右に振った。

「大丈夫。少し寝過ぎただけ」

「本当に？ それなら良いのだけれど……」

長い、長い、夢を見ていたような気分だつた。
だけど、夢ではないのだと思つ。

夢であつたなら、どんなにか良いことと思つ。
セレナの未来がああだなんて、信じたくなかつた。

だけど、過去のヴィッツやアイシスと出会え、
話せたことまでも夢であつて欲しいとは思わない。
彼らと会えたことを嬉しく思つから。

「それより、何か用なのか？」

俺は怪訝な顔で彼女を見上げた。

すると、彼女は拗ねたような表情をつくった。

「用が無ければ来とはいえないの？」

「なんこと言つてないだろ。来いよ、いつでも。俺の顔を見こー！」

ふざけた口調で言いながら、俺はベッドから腰を上げる。
しばらく座っていたおかげで、もう四肢はしない。
これなら動けそうだ。

俺は両手を挙げ、大きく伸び上ると、彼女に振り返った。

「よおく寝たし、少し散歩すつか。付き合えよ？」

23・そして、交わっていく道の先。

手櫛で寝癖を直しながら部屋を出る。
廊下は少し騒がしい。

「なんか楽しい」とでもあったのか?」

「楽しいことというか、
ネツアク寮の人たちがグランドで戦闘訓練をやっていたわ

「戦闘訓練?」

「というより、決闘だつたかしら?」

「決闘? ? ?」

不穏な響きに眉を寄せる。

「いつたい、誰と誰が?」

「誰だつたかしら? 知らない名前だつたから……。
う……り……「一ん」

「うり?」

必死に思い出そうとする彼女を伴い、
ティファアレト寮のエントランスに向かつ。
時刻は、夕暮れ。

エントランスは暖かそうな赤い光に包まれている。

「思い出した。『ラディール』さんよ

「だれ？」

「ダークエルフの人よ」

「へえ。……その人と？」

「ラディールさんと……もうひとりは小さい子よ。ええっと……」

その時、

エントランスの外から明るい声が響いた。

「幻薬の効果が切れて良かつたわ」

「むー。リンドは大きい方が良かつたのだ」

「そのうち自然に大きくなれるわよ」

「リンンドは大きくなる!
大きくなつて、強くなるのだ!」

「はいはい。頑張つて」

ティファアレト寮にやつてくる人影。
少女と小さな子どもなのだ。

あ、と俺の隣で短い声が上がつた。

「思い出した。リンンドブルムちゃんよ。
ほら、ちょうどそこにいるわ。こっちに来るの見えるでしょう?
もう決闘は終わつたみたいね」

「…………なんだつて……?」

俺は小さく聞き返し、そして、体が凍り付く。
おそらく彼女は律儀に同じことを繰り返し言つてくれただろう。
だが、今の俺は周りの音がいつさい聞こえなくなつてしまつた。
心なしか、視界が暗く沈んでいる。

2つの影がエントランスの中に入つてきた。
小さな子どもは自分自身のことを“リンンド”と言ひ、
もう一人の少女に明るく話しかけている。

……この子が……リンドブルム……。

擦れ違う。

浅黒い肌。

闇のように黒い髪は、
肩に着くか、着かないかの長さに切りそろえられている。

湖のような蒼い瞳は大きく、キラキラと輝く。
その瞳と視線が交わった気がしたが、気のせいかも知れない。

……この子が……リンドブルム……なのか……。

未来で会つた妹の話では、
リンドブルムが自分を殺すのだといつ……。

では、この小さな子が、俺を……？

一瞬だった。

だが、その一瞬、

俺はリンドブルムと肩を並べ、擦れ違った。

振り返れば、何も知らない小さな背中が、
どんどん遠ざかっていく。

(…………どうか、死なないで。

……お願いだから、リンドブルムには近付かないで)

未来からセレナの声が聞こえた気がした。

やがて、少女達は廊下の先を曲がり、その姿は見えなくなつた。

「ベルタ？ ビッグ、したの？」

袖を引かれて、ハツとなる。

緩く頭を左右に振つて、小さく微笑んだ。

「なんでもない」

微笑んだ……つもり。

ちゃんと笑えている自信は、ちつともなかつたけれど、
でも、今はそれが精一杯。

なぜなら、俺は今、
未来で知らされた“死”と出合つてしまつたのだから。

どうすれば、助かるのか。

どのように行動すれば、死なずに済むのか。

……分からぬ。

分からないけど、未来通りに時が進むのであれば、
“死”は確実に俺に迫つてゐるわけで、

何もしなければ、あの未来は変わらない。

「とりあえず、あがいてみつか」

「え？」

服の上から腕に刻まれた醜いものに触れる。
怪訝顔をする彼女に振り返った。

「散歩から戻つたら、

学問と真面目に向か合つてみよつかな、つて」と

ベルタが？ とこう聞き返しと、
変なものでも食べたのかしら？ とこう疑問に口を喰はず、
俺は紅色に染まつた森の中へと進んでいった。

おわり

23・そして、交わっていく道の先。（後書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」（<http://s01entia.jpn/>）の一次創作小説です。

オリジナル設定や独自の解釈をしている部分があります。

ゲームをプレイしていなければ分からないような内容だったかもしれません。

しかも、一次小説というよりも、プレイ小説といった感じかもしれません。

もしこの小説を読まれまして、興味を持たれた方は、ゲームを遊んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463n/>

時空の追い人 - 紅炎のソレンティア -

2010年10月9日03時27分発行